市原市喜多仲台遺跡

２００１

山　喜　興　業　株　式　会　社
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

房総半島のほぼ中央に位置する市原市は、南部に丘陵地帯、北西部には台地及びそれを取り巻くように沖積低地が広がり、そこには多くの支流を取り込んで、村田川、養老川が、蛇行しながら東京湾に注いでいます。加えて温暖な自然環境は、古来より人々の生活に適していたと見られ、市内には県下でも有数の貝塚である西広貝塚・祇園原貝塚をはじめとして、上総国の中心部であったことを示す上総国分僧尼寺跡など、数多くの貴重な遺跡の存在が確認されております。

一方、市原市は首都圏に近接するところから、交通網の整備、住宅建設など、開発行為が急速に行われてきましたが、長引く景気後退の中、ひところまでの大規模な開発は見られないものの、今後も人々の生活に不可欠な社会基盤の整備事業は継続されてゆくことが予想されます。かねてより開発と文化財保護をいかなる価値観を持って調和させるのか、また、文化財をどのように活用するのかは、私たちが、これまで以上に意を注がなければならない大きな課題であると考えます。

本書『喜多仲台遺跡発掘調査報告書』は、砂利採取事業に先立って、記録保存を目的とした発掘調査の調査報告書であります。研究者はもとより、多くの方々に、市原市の歴史を記す一資料として、また文化財の重要性を理解していただく一助として、広く活用されることを望むものであります。

最後に、喜多仲台遺跡の調査及び整理報告にあたり、御指導、御協力を賜りました山喜興業株式会社、関係諸機関に対して、心より御礼申し上げます。

平成13年３月31日

財団法人　市原市文化財センター
理事長　小　茶　文　夫

例　　言

1．本書は、千葉県市原市喜多567番地の一部ほかに所在する、喜多仲台（きたなかだい）遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は砂利採取に先立って実施されたものであり、山喜興業株式会社（代表取締役　佐々木喜孝　千葉県千葉市稲毛区穴川2丁目9番13号）の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが行ったものである。

3．調査は、対象面積が450㎡の本調査であり、これは、平成11年度に財団法人市原市文化財センターにより実施された、対象面積3,400㎡の10％にあたる340㎡の確認調査の結果を受けたものである。

4．発掘調査及び整理作業は、下記の日程で実施した。

本 調 査　　平成12年６月15日～平成12年７月４日　　調査担当　北見一弘

整理作業　　平成12年８月16日～平成12年10月６日　　整理担当　北見一弘

5．本報告書の執筆、作成は北見が担当した。

6．財団法人市原市文化財センター調査コードは、セ325である。

凡　　例

1．遺構、遺物の縮尺は、挿図見出しに示したが、基本的に竪穴住居跡が１/60、それ以外の遺構は1/40、遺物は/３が基本で、鉄器のもが１/２である。

2．遺構断面図の水糸高に付記された数字は標高を示し、単位はｍである。

3．遺構実測図中の破線は、輪郭線の延長戦は推定線を、竪穴住居輪郭線の内側にあるものは硬化面をしめす。

4．遺物の計量にはエー・アンド・ディ社製パーソナル電子天秤EW-300Gを使用した。

5．竪穴住居の面積測定には、ウチダデジタルプラニメーターKP-90を使用した。

6土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖　1988版』日本色研事業株式会社に従った。

本　文　目　次

序文
例言
第１章　序　　説……1
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　遺跡の位置と環境……1
第２章　調査成果……3
　第１節　遺跡の概要……3
　第２節　遺構と遺物……5

挿　図　目　次

第１図　喜多仲台遺跡位置図（1/100,000）…… 2
第２図　喜多仲台遺跡周辺地形図（1/5,000）…… 2
第３図　調査対象範囲と本調査区（1/400）…… 4
第４図　001号遺構及び遺物実測図（1）（1/60・1/3）…… 6
第５図　001号遺構遺物実測図（2）（1/3）…… 7
第６図　001号遺構遺物実測図（3）（1/3）…… 8
第７図　Ａ区全体図及び008号遺構実測図（1/60）…… 9
第８図　005号遺構及び遺物実測図（1/60・1/3）……10
第９図　006号・007号遺構及び遺物実測図（1/40・1/3）…… 11
第10図　002号遺構及び遺物実測図（1/60・1/3）…… 12
第11図　002号遺物実測図（1/3）…… 13
第12図　003号遺構実測図（1/40）……14
第13図　Ｄ区1号住居実測図（1/60）……15
第14図　Ｄ区1号住居遺物実測図（1/3）…… 16
第15図　Ｅ区土抗実測図（1/40）…… 17
第16図　Ｆ区土抗実測図（1/40）…… 18
第17図　遺構外遺物（1）……19
第18図　遺構外遺物（2）……20

図　版　目　次

図版１　遺　構
図版２　遺　構
図版３　遺構及び遺物
図版４　遺　物
図版５　遺　物
図版６　遺　物
図版７　遺構外遺物（1）
図版８　遺構外遺物（2）・001号出土鉄製品

第１章　序　　説

第１節　調査に至る経緯

発掘調査は、千葉県市原市喜多地先における砂利採取に先立って実施された。工事の着工に先がけ、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に、山喜興業株式会社より同地点における埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについての照会が提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課、山喜興業株式会社の三者による協議の結果、同地点の埋蔵文化財については発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなった。

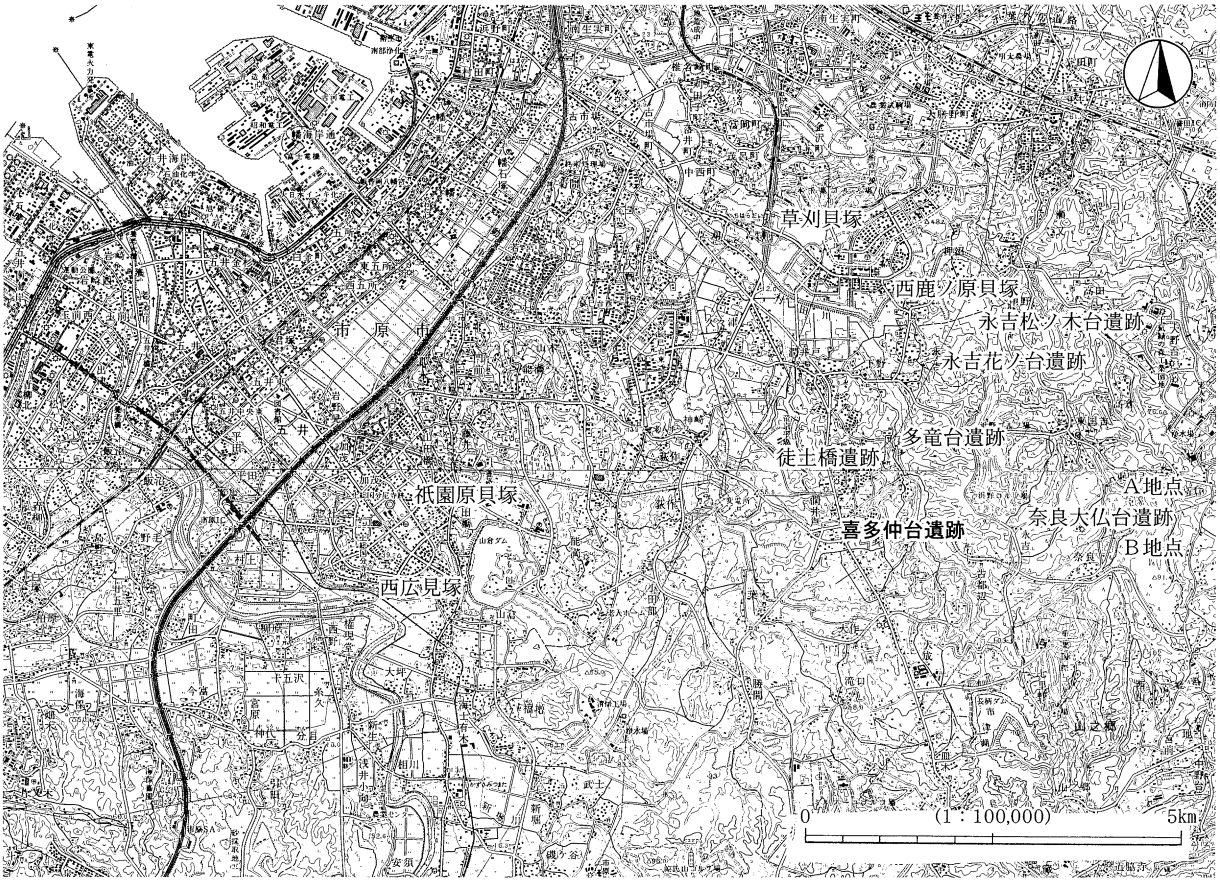
調査は、平成11年度に文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会より委託を受け財団法人市原市文化財センターが、3,400㎡を対象として、確認調査を実施している。その結果を受け、平成12年度に本調査を行うこととなった。

第２節　遺跡の位置と環境

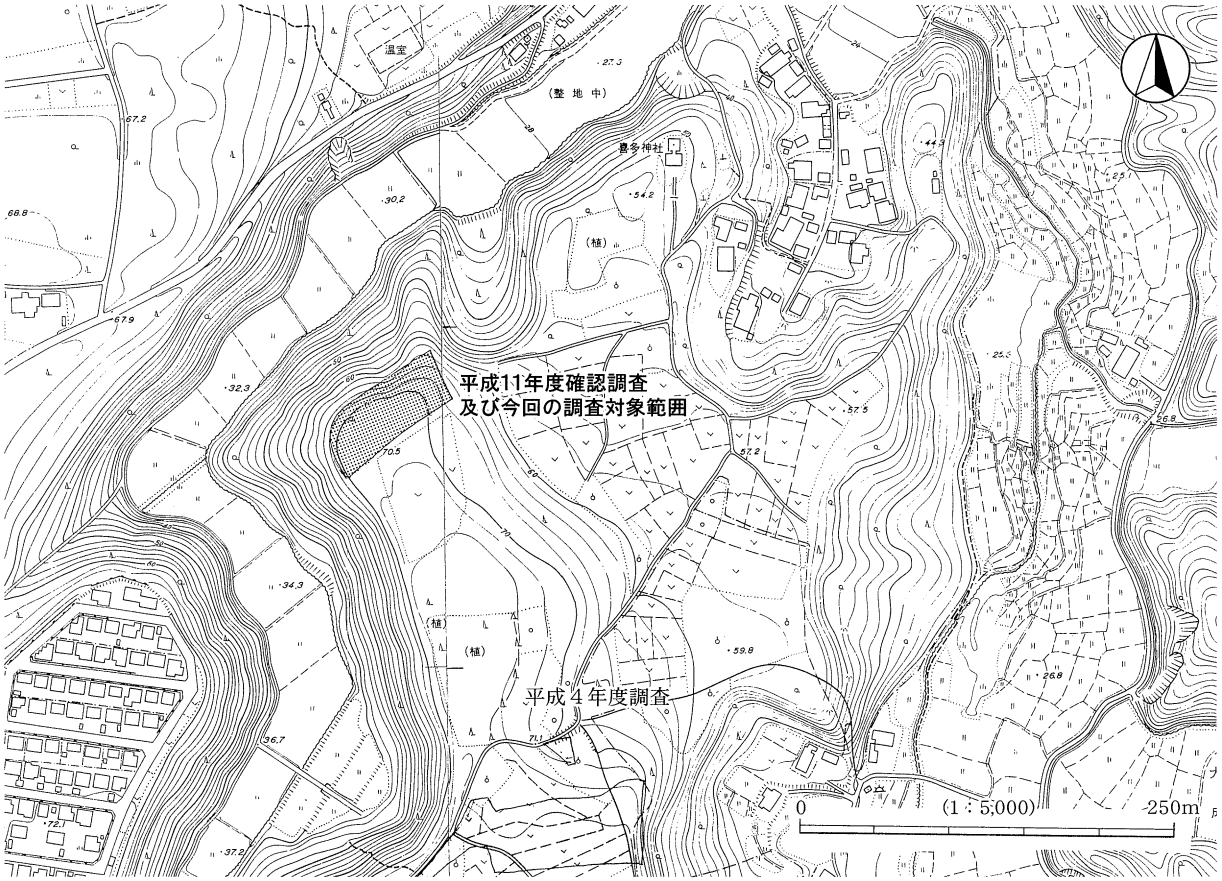
今回調査を実施した喜多仲台遺跡は、市原市の北東部に位置する。遺跡周辺は、村田川上流域の左岸に属する。村田川は、市原市の北東部に隣接する長生郡長柄町に源を発し、本市域の北部を西流して東京湾に達する、全長20㎞ほどの河川である。遺跡はこの村田川本流から2.5㎞ほど南に離れた地点、村田川支流に面した標高70ｍ程の舌状台地上に展開している。この台地は、南から北に伸び、西、北側は急斜面であり、東側において平坦部を含む、ややなだらかな地形を呈する。この台地と、三方位に入り込む谷との比高差は40ｍ程を測る。調査地点は、この台地上の平坦部北端に位置する。

喜多仲台遺跡としては、平成4年度に、今回の調査区から南に300ｍの地点、同台地上の9,000㎡を対象として本調査を実施している。この調査では、縄文時代竪穴住居跡1軒、陥し穴・土坑29基、平安時代初期の竪穴住居跡18軒、この住居跡に伴うとみられる掘立柱建物跡9棟、地下式壙3基、中近世の溝跡、道路跡等を検出している。中でも平安時代の竪穴住居跡は、約半数が焼失住居である。特徴的な遺物としては、平安時代のものが中心で、銅製の鈴、「大新」、「大幡」と判読できるものを含む墨書土器が10数点、鉄製品が40点出土している。鉄製品は刀子、手鎌、紡錘車、鉄斧、釘、鏃、火打ち金、馬具等で、馬具は、素環形の鏡版を持つ轡である。

周辺は大規模開発の進む村田川下流域に比べ、未だ開発の手が及んでいない地域といえる。このため、周知の遺跡としては高密度でその存在が予想されるものの、周辺地域の調査事例は多いとは言えず、当該地域の歴史像は不明な点が多い。こうした中で、舌状台地を一つ挟んで東に３㎞程の台地上に奈良大仏台遺跡が在る。本調査は平成元年に実施され、標高65ｍ程の台地上北端に位置するＡ地点からは、縄文時代中期加曽利ＥⅡ式の竪穴住居跡3軒、縄文時代土坑30基、平安時代初期竪穴住居跡1軒等が検出されている。奈良大仏台遺跡Ａ地点は、その立地、検出遺構に喜多仲台遺跡との共通性が認められ、本地域における当該期の集落の在り方を示すものと考えられる。縄文時代中期の遺跡としては、北側の谷を隔てた2㎞程に多竜台貝塚、更に北側の村田川に面した台地上に西鹿ノ原貝塚、村田川下流域には草刈貝塚が存在する。平安時代の遺跡、特に本遺跡001号遺構竪穴住居跡と近い時期と考えられる遺構の調査事例は少なく、やや先行すると考えるが、西に6㎞ほど離れた市原台地上の郡本遺跡第2次調査13号遺構竪穴住居の事例が認められる。



第１図　喜多仲台遺跡周辺位置図　（国土地理院発行地形図　1：50,000　千葉　姉崎より）



第２図　喜多仲台遺跡周辺地形図　（市原市地形図　1：2,500）

参考文献

市原市教育委員会　1998『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』

大村　直　1992『市原市奈良大仏台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告第47集

財団法人市原市文化財センター　1996「喜多仲台遺跡」『市原市文化財センター年報』平成4年度

鶴岡　英一　2000「喜多仲台遺跡」『市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会

田中　清美　1995『市原市郡本遺跡（第2次）』財団法人市原市文化財センター調査報告第56集

笹生　衛　1989「房総における中世的土器様相の成立過程」『史館』第21号

第2章　調　査　成　果

第1節　遺跡の概要

調査は、平成11年度の確認調査の結果、本調査区が６ヶ所に分かれたため、調査順にＡ区、Ｂ区、Ｃ区、…Ｆ区と名称して進めた。遺構番号は、基本的に着手した順序で001から付与したが、確認調査で遺物を多く取り上げている遺構については確認調査時の遺構番号をそのまま活かした。また、調査区には20m×20mの公共座標を使用した大グリッドを設定した。喜多仲台遺跡における基本層序は、Ⅰａ層：表土、Ⅰｂ層：黄橙色砂質土、Ⅱａ層：黄褐色土、Ⅱｂ層：明褐色土（新期テフラ）、Ⅱｃ層：褐色土、Ⅲ層：ソフトロームである。なお、Ⅰｂ層はテフラ層と考えられ、市内に於いては確認事例が少なく(1)、その実体は時期的な問題も含め、明らかにはなっていないのが現状である。本遺跡では平安時代中頃と考える遺構の覆土上層に確認できる。現段階では、詳細については、述べる術を持たないため、このことについては平成12年度年報で触れたいと考えている。調査はⅡａ層中に平安時代の遺構が、Ⅱｃ層中に縄文時代中期の遺構が形成されているとの確認調査による知見から、先ず、重機によりⅡａ層までを掘削し、遺構の有無を確認した後、Ⅱｃ層までを再び重機で掘削して遺構の確認、調査という手順を採った。

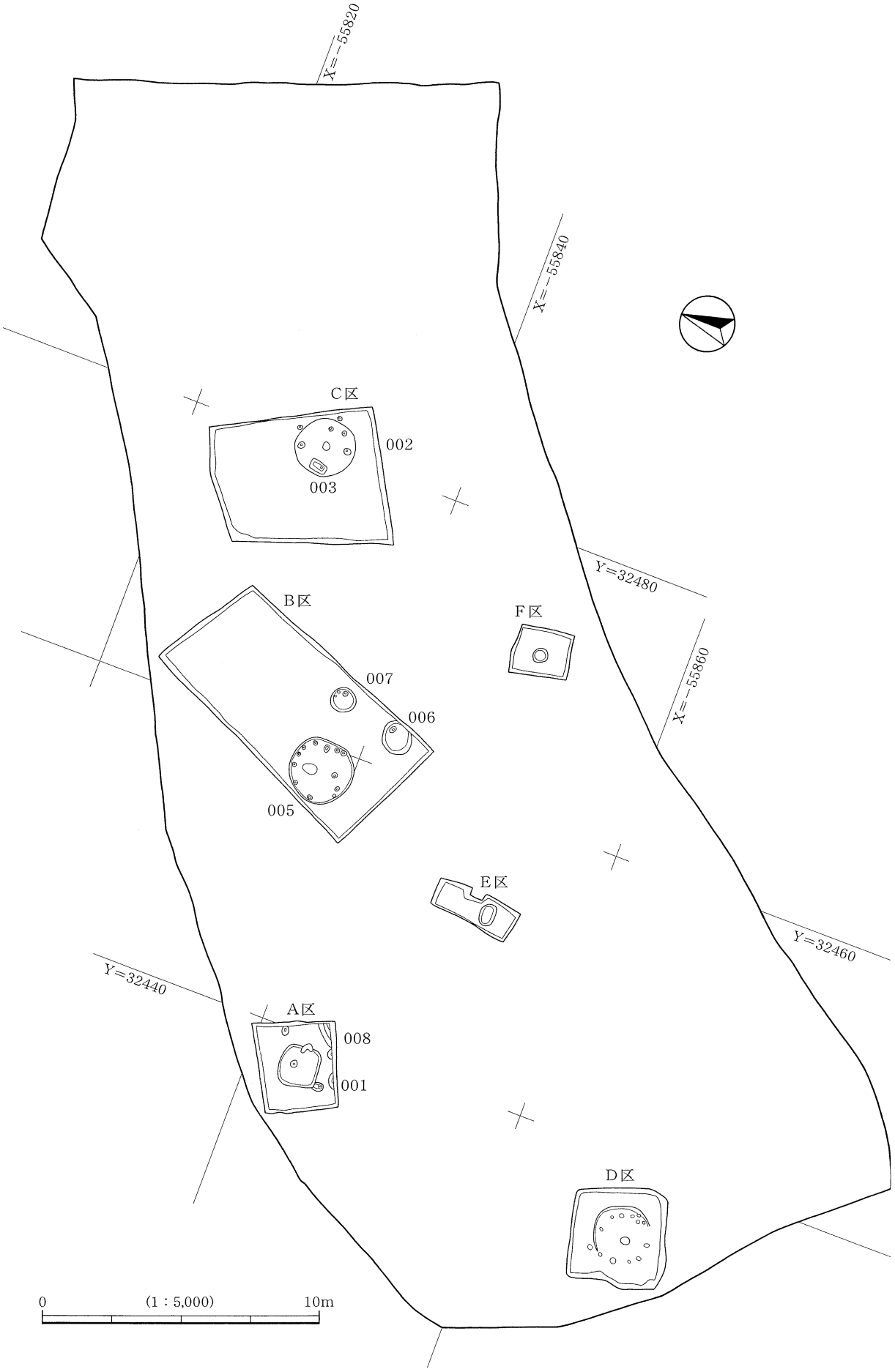
調査の結果、縄文時代中期加曽利ＥⅡ式期の竪穴住居跡3軒、縄文時代中期土坑2基、縄文時代陥し穴2基、土坑2基、平安時代竪穴住居跡1軒を検出した。このうち、中期加曽利Ｅ式期とした土坑については、1基は加曽利ＥⅡ～ＥⅢとみられる遺物を伴うが、別の1基からは遺物の出土は認められない。平安時代の遺構に伴う遺物は出土状態から一括投棄された可能性が高い。遺物が限られた数なので時期を確定することは出来ないが、遺物中、土師器杯は回転糸切り後無調整であり、口径は10ｃｍほどの小型のものであること、主体は高台付椀であり、半数近くが黒色処理されていることなどから、遺構の時期は、おおよそ10世紀後半頃の土器様相を示しているのではないかと考えられる(2)(3)。

参考文献

(1)　牧野光隆　2001『市原市新井花和田遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第74集

(2)　笹生　衛　1989「房総における中世的土器様相の成立過程」『史館』第21号

(3)　笹生　衛　1990「房総における黒色土器の展開と終焉」『東国土器研究』第3号　東国土器研究会



第３図　調査対象範囲と本調査区

第２節　遺構と遺物

Ａ区の遺構・遺物

001号遺構（竪穴住居）（第4・5・6図）

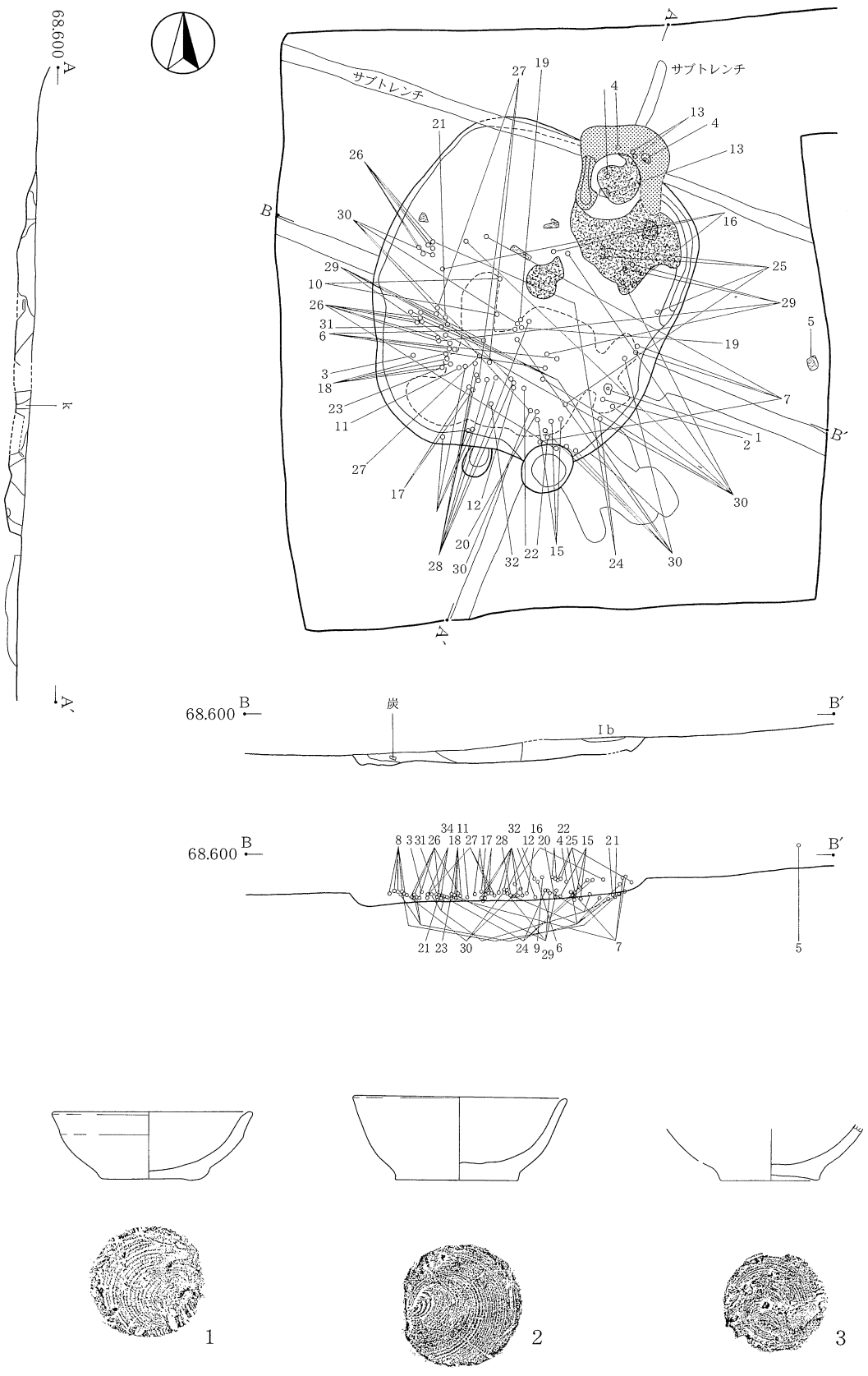
遺　構　Ａ区中央に位置する。床面の標高は68,14ｍ±５cmを測る。確認面に於いて、明瞭なプランが確認できなかった為、土層観察用のベルトに沿ってサブトレンチを設定し、遺構範囲を把握した。平面形態は不整方形を呈する。カマドを基準とした主軸方向はＮ－27°－Ｅとなる。遺構規模は主軸長3.10ｍ、短軸長2.80ｍ、確認面から床面までは10cm～17cm、カマド部を除く床面積は7.12㎡を測る。床面は、遺構の堀込みがソフトロームまで達せず、Ⅱｃ層中に床面が形成されている為、明瞭な硬質面は認められず、中央より南側にやや締まった部位が確認された。貼床ではない。カマドは北壁の中央よりややずれて設置されており、東側の袖部は検出していない。カマド焚き口部分から住居の東側隅にかけて床直上に焼土を主体として、カマドの構築材と見られる山砂を多く含む粘土粒が１.0ｍ×0.9ｍの範囲で検出されていることから、住居廃棄時に人為的な作用が加わっている可能性が在る。主柱穴、貯蔵穴は認められない。住居東側隅を中心として、周溝が認められる。ピット２ヶ所は覆土から本遺構に帰属するものではないと判断した。遺構覆土中には多くの焼土粒及び炭化物片が含まれ、その範囲は遺物の出土範囲、レベルと重複する。

出土遺物　住居南側、床よりやや５cm～10cmに集中して遺物は出土した。本調査における出土土器の総重量は17、900ｇを測る。内、実測遺物は5、055ｇである。このほかに確認調査時にロクロ土師器の杯が1点、高台付椀が2点出土している。杯は口縁部に油煙と見られる炭化物の付着が見られ、高台付椀は1点が、内面及び口縁部外面にミガキが、もう１点は内面及び口縁部外面に黒色処理が施されている。１～３はロクロ土師器杯で、底部は回転糸切り無調整。口径・器高・底径（以下計測値）は、１が9.7cm・3.2cm・5.1cm、２が10.4cm・3.9cm・5.9cmを測る。３は遺構外からの出土である。４～24はロクロ土師器高台付椀で、この内15～24は内面もしくは口縁部外面にまで黒色処理された個体である。計測値は4が9.5cm・4.7cm・（高台部径）5.1cm、5が10.9cm・4.8cm・5.9cm、６が復元値で（13.0cm）・（6.0cm）・（8.2cm）、７が14.0cm・5.9cm・6.8cm、８が13.4cm・5.3cm・7.2cm、９が14.0cm・5.3cm・7.2cm、15が（13.2cm）・（6.7cm）・（7.1cm）、16が（13.6cm）・5.5cm・7.2cm、18が14.5cm・5.5cm・8.0cmを測る。13は唯一底部に無調整部の認められる個体。25は灰釉陶器で、内面全体に灰釉がハケヌリされ、高台部断面形は方形を呈する。体部外面下半部及び、底部外面は回転ヘラケズリである。黒笹14号窯式と見られ、口縁部の形状からやや新相を示すか。26は高台部で器形は皿か杯であろうか。27～32は土師器甕である。このうち28～30は口縁部から胴部上位にかけて回転ナデが施されていることが特徴的である。33・34は刀子である。共に茎部を欠損している。図示していないが、このほかに鉄塊が７点出土している（図版８）。それぞれ１は直径3.8cm・重量14.3ｇ、２は4.2cm・49.8ｇ、３は3.7cm・11.7ｇ、４は4.4cm・8.4ｇ、５は4.3cm・33.7ｇ、６は4.3cm・29.4ｇ、７は2.6cm・9.1ｇを測る。

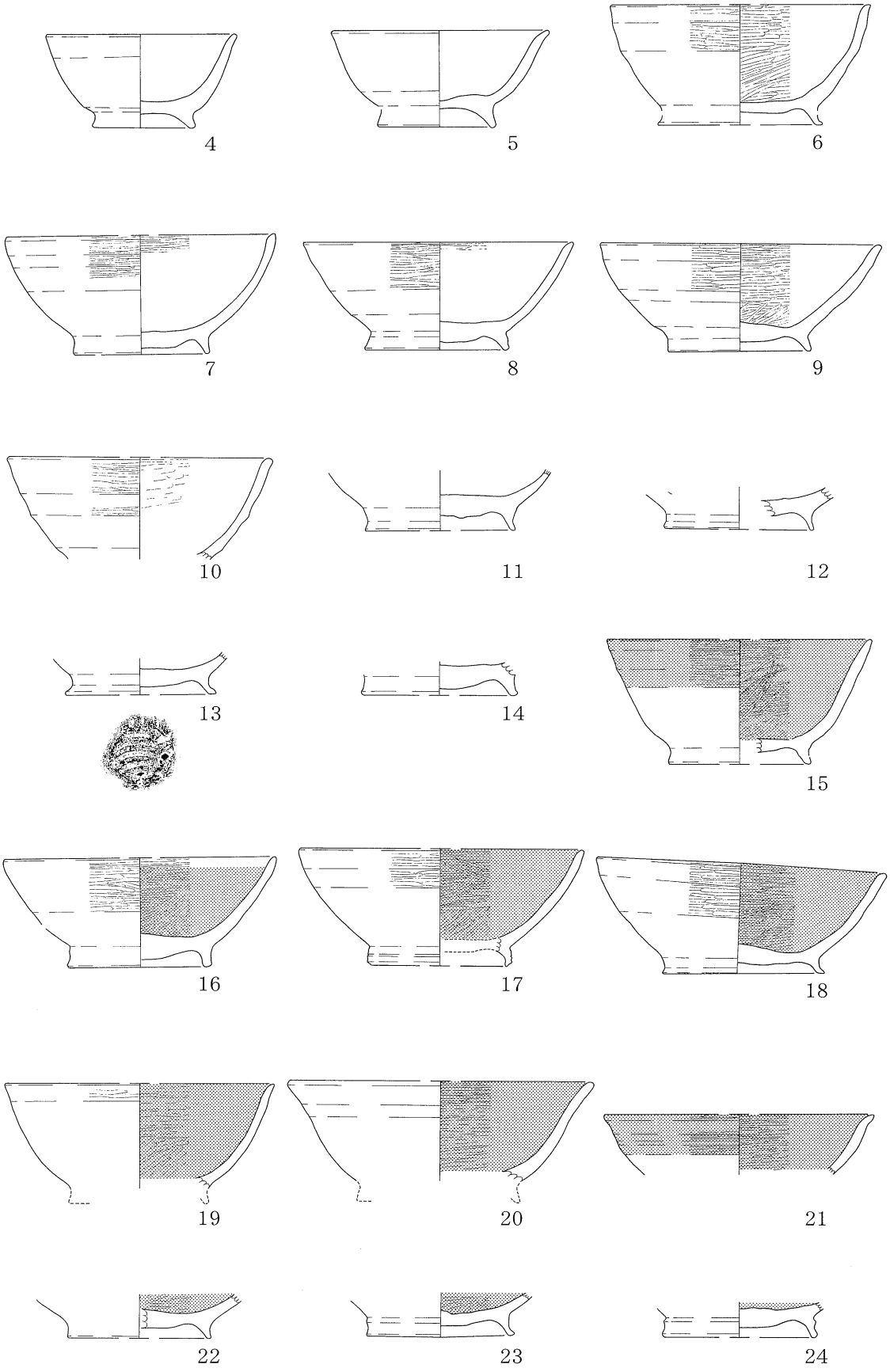
土　層　覆土は黒褐色土が主体で、焼土粒、炭化物が多く認められた。また、僅かではあるが、確認面における覆土上層の一部にＩｂ層が認められ、遺構が完全に埋没する前にＩｂ層が形成された可能性が指摘出来る。

008号遺構（陥し穴）（第7図）

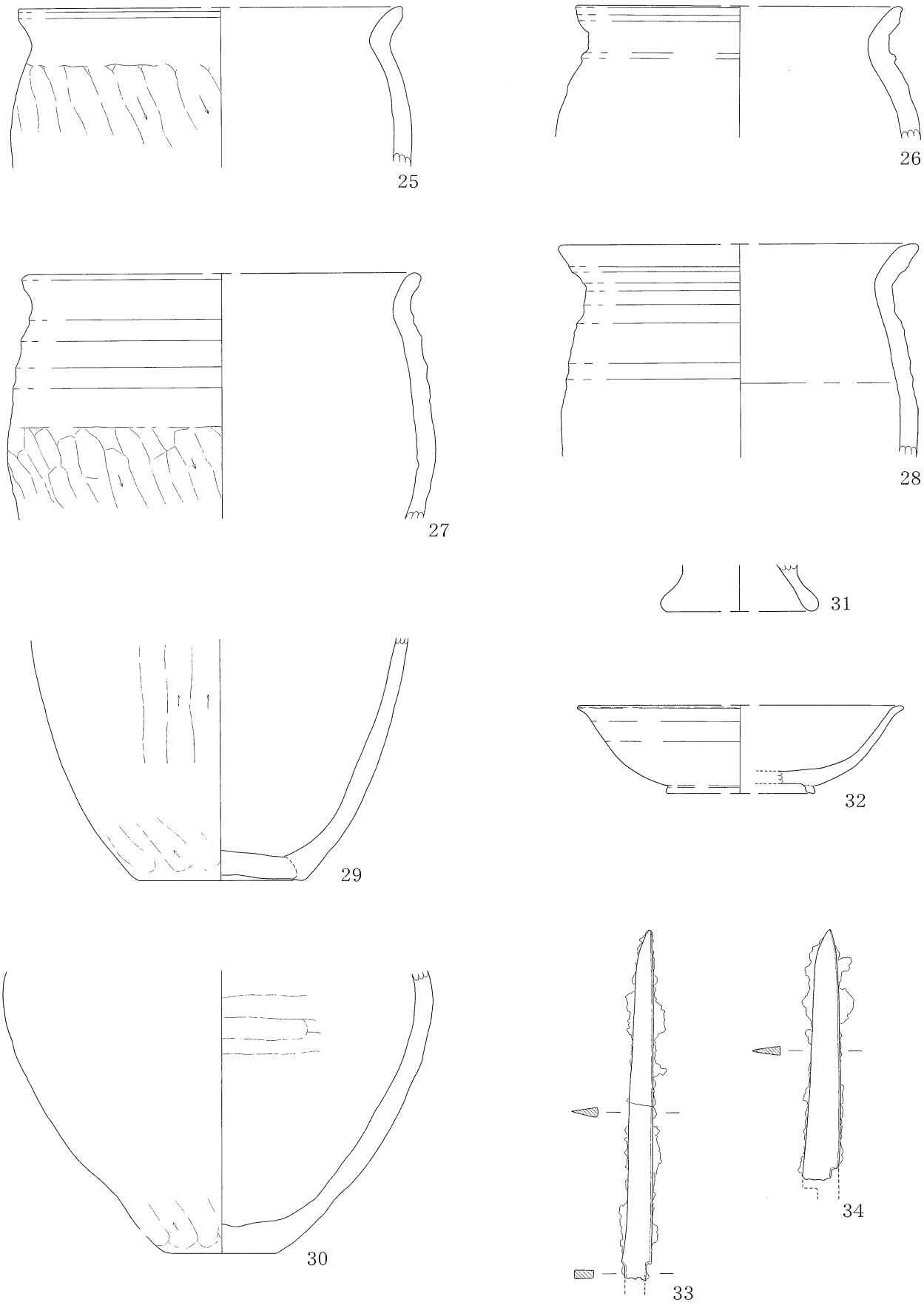
遺　構　Ａ区東隅の、北北西に下がる緩斜面に位置する。遺構プランは、同区において検出した平



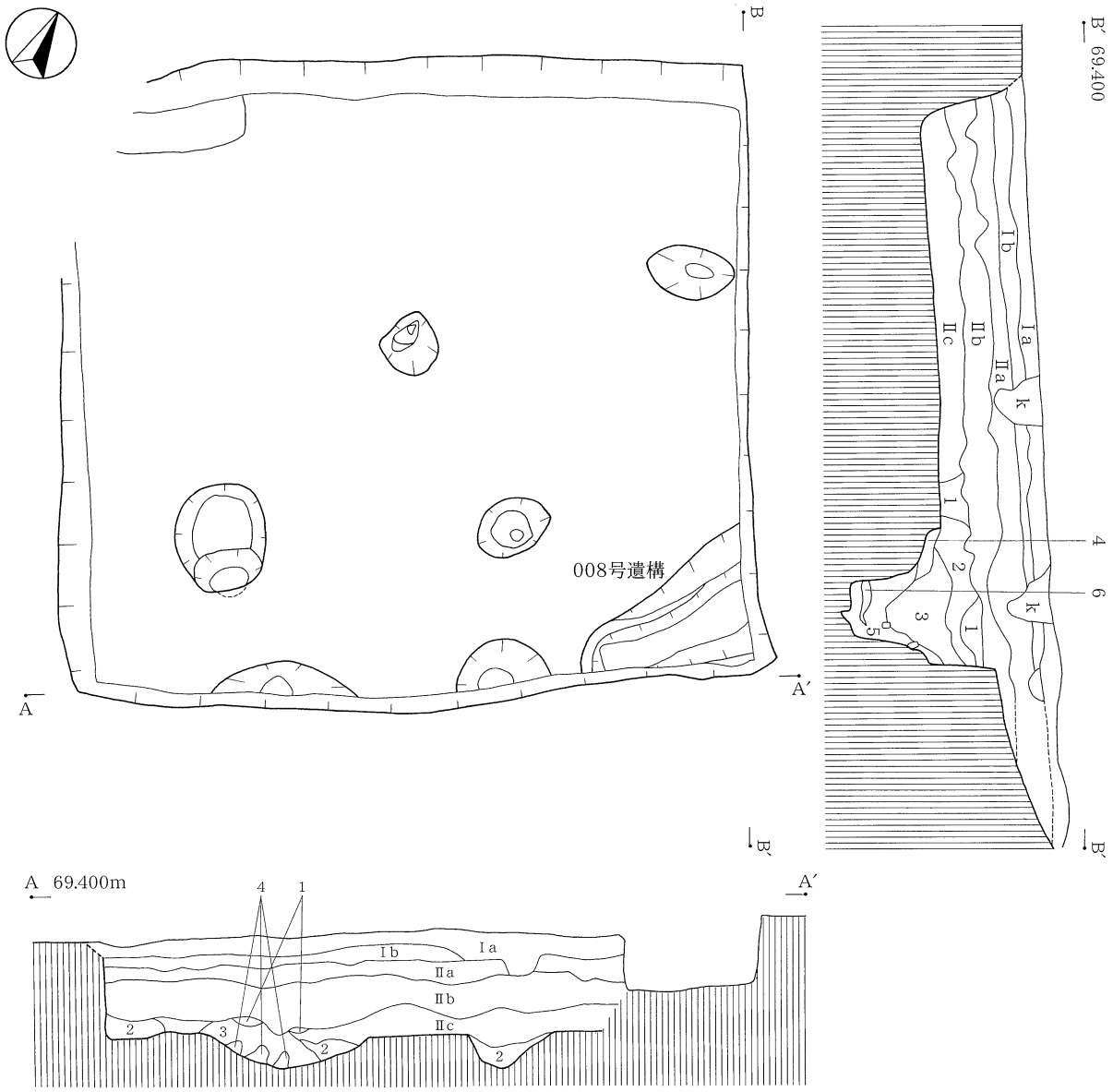
第４図　001号遺構及び遺物実測図（1：60・1：3）



第５図　001遺物実測図（1：3）



第６図　001号遺物遺物実測図（3）（1：3・鉄器1：2）

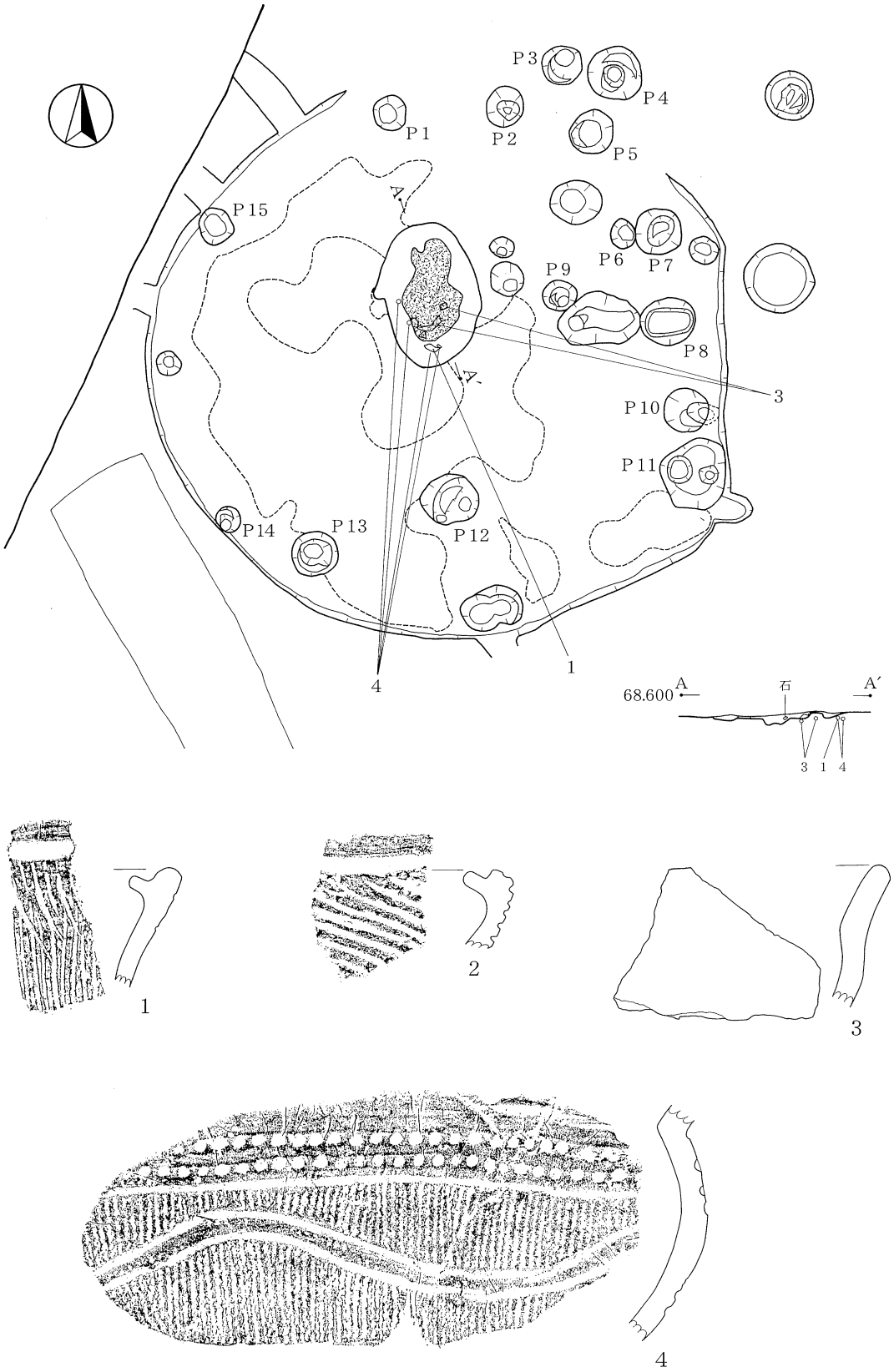


第７図　Ａ区全体図及び008号遺構実測図（1：60）

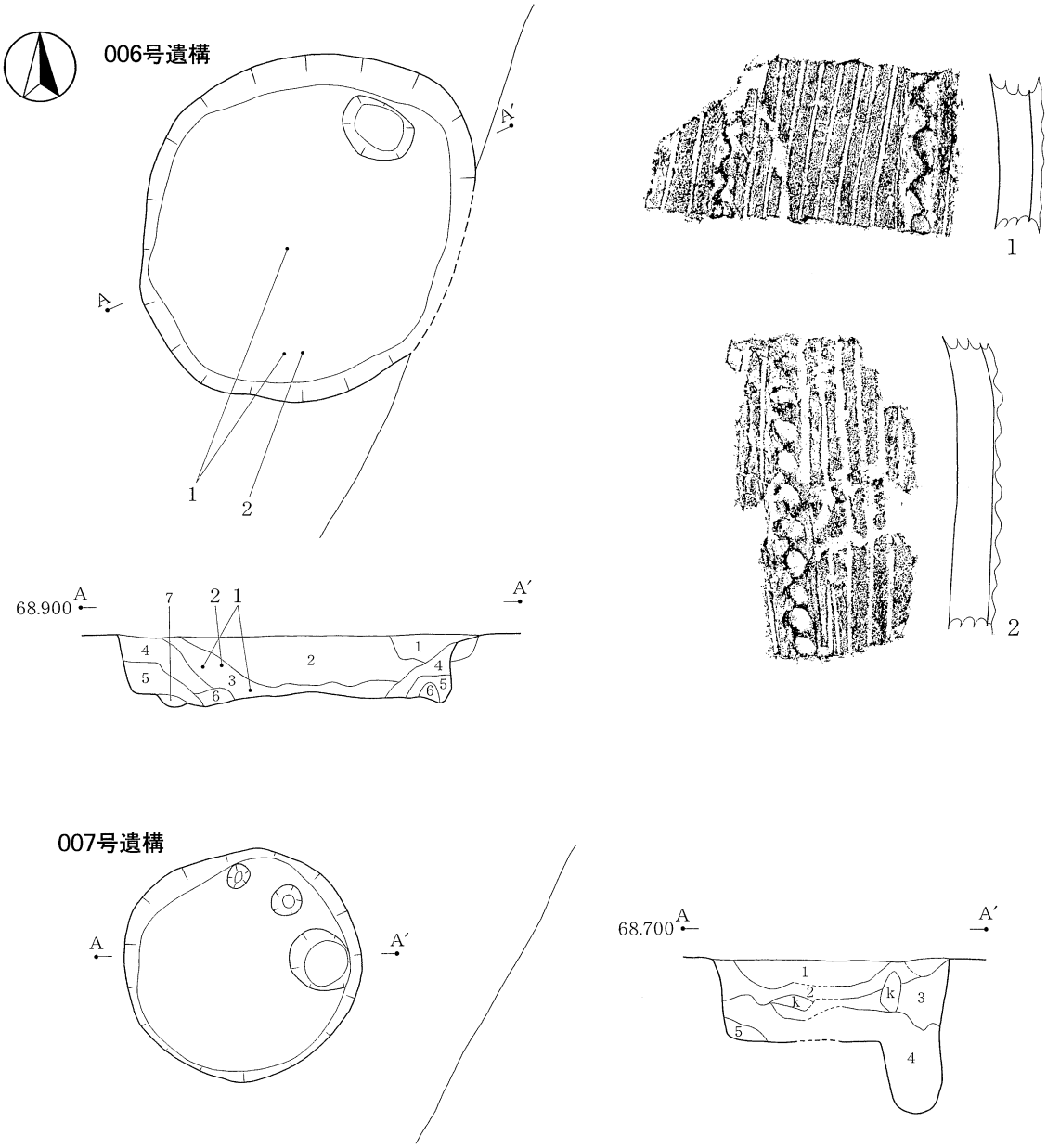
安時代住居の遺構確認面であるⅡｂ層では確認できず、Ⅱｃ層までを掘削した後に確認した。遺構の掘り込みは、断面観察によると、Ⅱｃ層と下位層との境界に不安定な線が見られることから、Ⅱｃ層中に存在することが想定できるが、不明瞭である。遺構は、調査区境界に位置するため、遺構全体の約半分ほどの調査にとどまる。平面形態は、上面が長楕円形を、底面が不整長方形を呈する。底面はハードローム上面に位置し、平坦且つ硬質であり、確認面からの深さは77cmを測る。断面形態は、底面より57cm上方を境界として、下位は垂直に近く、上位で遺構外方向に屈折する。断面図では中央付近に窪みが見られるが、付近は木根による攪乱が確認できた為、この作用に起因するものと判断した。遺構規模は底面において134cm×38cmを測る。長軸はＮ－36°－Ｅの方位を示す。遺構の位置する北北西に落ちる傾斜に対し、直角方向に長軸を持つ。

出土遺物　皆無である。

土　層　１層は7.5YR５/６明褐色土、２層は10YR２/１黒色土、３層は10YR４/３にぶい黄褐色土、



第８図　005号遺構及び遺物実測図（1：60・1：3）



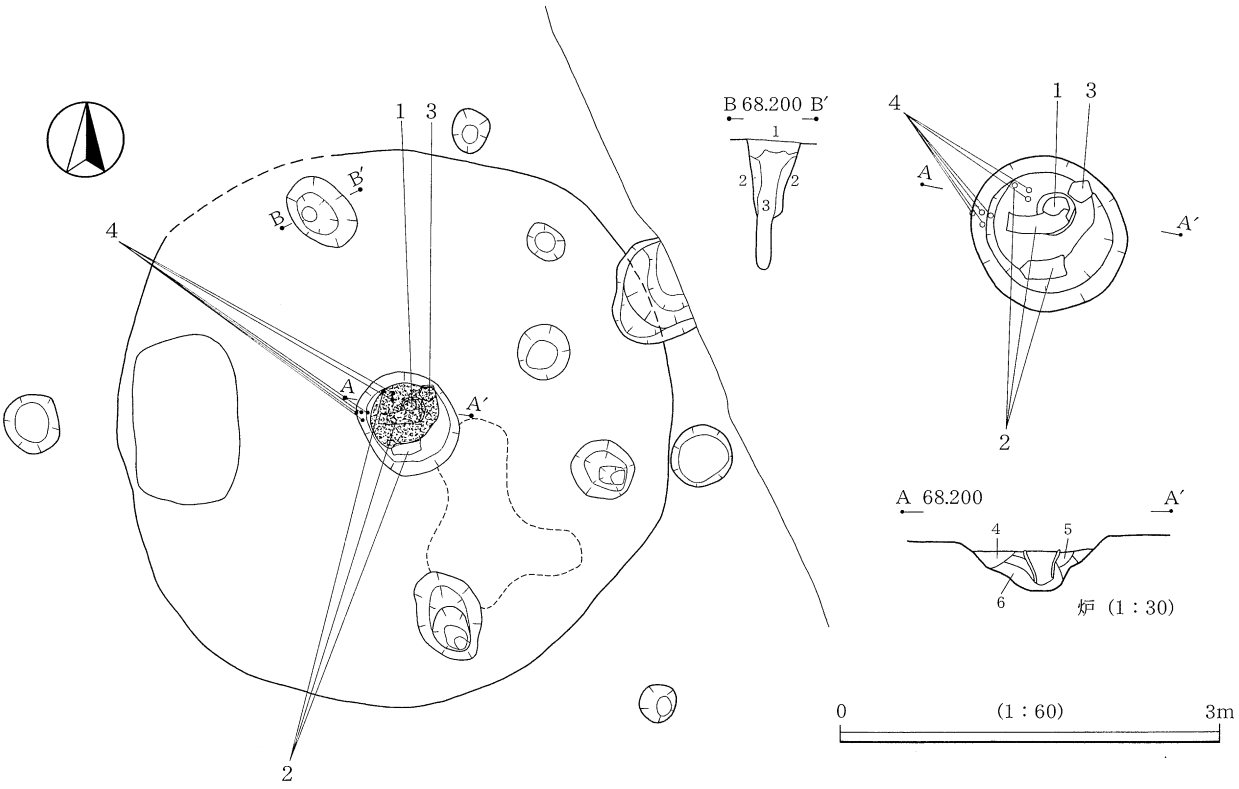
第９図　006・007号遺構及び遺物実測図（1：40・1：3）

４層は7.5YR５/６明褐色土、５層は10YR4/3にぶい黄褐色土である。

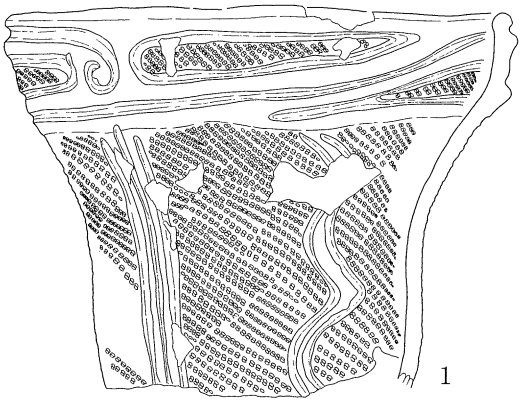
Ｂ区の遺構・遺物

005号遺構（竪穴住居）（第8図）

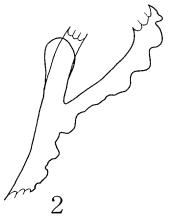
遺　構　Ｂ区南側に位置する。床面の標高は68,44ｍ±６cmを測る。周辺である。遺構の範囲は北側において特に不明瞭であるが、平面形態は円形を呈すると見られる。遺構の規模は直径5.50ｍ～5.60ｍ、確認面から床面までは8.0cm～17.5cmを測る。床面は明瞭な硬化部位を持たず、やや締まる程度にとどまる。この面積は22.7㎡となる。炉は135cm×90cmの楕円形を呈し、最深部で10cmを測る。長軸上南側に土器片を正位に立てている。間を開けて周辺部でも、別個体の土器片が出土している。この炉体土器を基準として住居の主軸方向を出すとＮ－10°－Ｗとなる。主柱穴となるべきピットは判別できない。主要なピットの床面からの深さは、Ｐ１が39.9cm、Ｐ２が62.3cm、Ｐ３が72.7cm、Ｐ４が



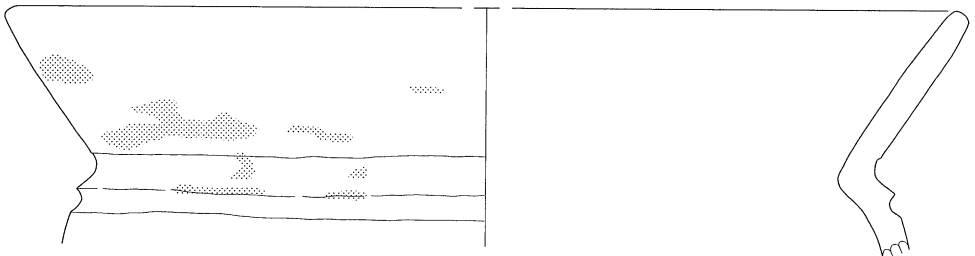
1 口縁部拓本



1

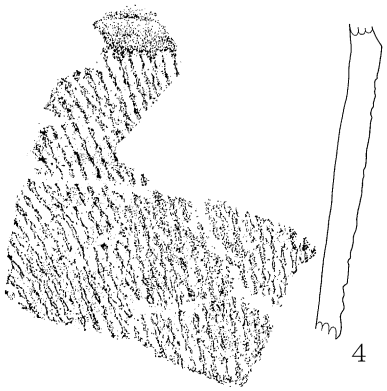


2



3

第10図　002号遺構及び遺物実測図（1：60・1：3）



第11図　002号遺物実測図（1：3）

42.9cm、P５が48.0cm、P６が45.3cm、P７が49.8cm、P８が86.4cm、P９が52.4cm、P10が96.4cm、P11が90.8cm、P12が51.9cm、P13が66.6cm、P14が31.9cm、P15が26.5cmを測る。

出土遺物　１・３・４は炉内から、２は覆土中から出土している。加曽利ＥⅡ期。遺物の出土量は少なく、1.365ｇを計る。この内掲載遺物は805ｇである。

006号遺構（土　坑）（第9図）

遺　構　Ｂ区南側、005号遺構（竪穴住居）の南東2.5mに位置する。底面の標高は68、41m±5cmを測る。平面形態は楕円形で、断面形はほぼ円筒状を呈する。遺構の規模は2.19m×1.88m、底面までは35.2cmを測る。底面は平坦である。北東隅に、底面からの深さ45.4cmを測るピットが位置する。

出土遺物　第一埋没土より上層から１・２が出土している。加曽利ＥⅡ～Ⅲ期。出土遺物は掲載遺物が全てである。

土　層　１層は暗褐色土、２層は暗褐色土φ５mmほどの黄褐色粒を多く、炭化物を少量含む、３層は暗褐色土、４層は暗褐色土でソフトロームがしみ状を呈する、５層は暗褐色土、６層はハードローム塊、７層はソフトローム主体。

007号遺構（土　坑）（第9図）

遺　構　Ｂ区南側、005号遺構（竪穴住居）の２2m、006号遺構（土坑）の北３mに位置する。底面の標高は68、10m±２cmを測る。平面形態はほぼ円形で、断面形はほぼ円筒状を呈する。遺構の規模は1.38m×1.32m、底面までは47.9cmを測る。底面は概ね平坦である。北東側隅に、底面からの深さ40cmを測るピットが位置し、近接して深さ３cm～５cmの窪みが2ヶ所認められる。

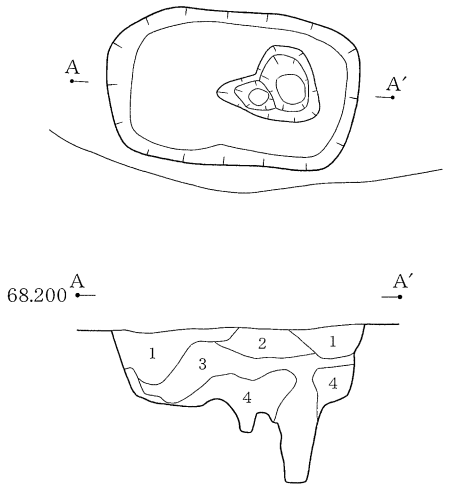
出土遺物　皆無である。

土　層　１層はにぶい褐色土で黒色の小粒を多く含む、２層はにぶい褐色土でφ５mm以下の黄褐色粒を多く含む、３層は暗褐色土でφ５mmほどの黄褐色粒多く含む、ソフトロームしみ状を呈する、４層はにぶい褐色土でφ10mmほどの黄褐色粒、炭化物少量含む、５層はソフトロ
ーム主体。

Ｃ区の遺構・遺物

002号遺構（竪穴住居）（第10図）

遺　構　Ｃ区東側に位置する。遺構範囲は北側で不明瞭であるが、平面形態は円形を呈する。遺構の規模は直径4.40m～4.45m、確認面から床面までは5.0cm～9.7cmを測る。床面は明瞭な硬化部位は認められず、炉南側周辺に、やや締まる部位が確認できるのみである。掘り込み面の面積は16.0㎡となる。レンズ上の断面形態を呈する。炉は85.0cm×70cmの楕円形を呈し、床面からの深さは、最深部で27cmを測る。炉内には、ほぼ中央に胴部下位以下を欠損した土器が正位に埋設され、土器の口縁の一部に被せた形で大型の土器片が水平に置かれ、やや間を開けて、同一個体の破片が火床面縁辺に敷かれている。このほかにも、別個体の土器片が火床面縁辺部から出土している。炉体土器を基準として住居の主軸方向を想定すると、N－9°－Wとなる。主柱穴となるべきピットは判別できない。主要



第12図　003号遺構実測図（1：40）

なピットの床面からの深さは、Ｐ１が100.8cm、Ｐ２が37.4cm、Ｐ３が28.1cm、Ｐ４が91.4cm、Ｐ５が95.2cmを測る。

出土遺物　１～４は炉内から出土している。加曽利ＥⅡ期。加曽利ＥⅡ期。３は頚部を中心として部分的に赤彩が遺存している。

土　層　１層は暗褐色土、２層はソフトローム主体、３層は黒褐色土で締まらない、４層はソフトロームしみ状を呈する、５層は炉体土器周辺覆土で、10Ｒ6/6赤橙色を呈する、６層は、7.5ＹＲ5/4にぶい褐色土で下位に被熱に起因すると見られる粒状の層が認められる。

003号遺構（陥し穴）（第11図）

遺　構　Ｃ区、002号遺構（竪穴住居）に重複する。先後関係は不明。平面形態は長方形で、長軸1.35m、短軸0.81m、断面形はほぼ逆台形で、確認面からの深さは、41.0cmを測る。底面はほぼ平坦で、その中央より南寄りにピットが位置し、底面からの深さは38.2cmを測る。

出土遺物　図化していないが、ピットの覆土上層から黒曜石の剥片が1点出土している。

土　層　１層は黒褐色土でソフトロームしみ状を呈する、２層は黒褐色土で薄くソフトロームがしみ状を呈する、３層は、黒褐色土、4層は、暗褐色土で、部分的にソフトロームがしみ状を呈する。

Ｄ区の遺構・遺物

39トレンチ1号住居（竪穴住居跡）（第12・13図）

遺　構　Ｄ区中央に位置する。遺構の範囲は中央から西側において不明瞭であるが、平面形態は不整円形を呈すると見られる。遺構の規模は、検出した掘り込み面から炉の距離を基準とすると、直径4.60m～5.50mを推定する。確認面から床面までは10.5cm～20.8cmを測る。床面は炉を中心として硬化面が確認出来る。炉は61.0cm×53.0cmの楕円形を呈し、最深部で19.0cmを測る。炉の南側火床面端部に土器片を立てている。この炉体土器を基準として住居の主軸方向を出すとＮ－24°－Ｗとなる。主柱穴となるべきピットは判別できない。主要なピットの床面からの深さは、Ｐ１が48.4cm、Ｐ２が19.9cm、Ｐ３が28.2cm、Ｐ４が67.0cm、Ｐ５が50.5cm、Ｐ６が50.0cm、Ｐ７が42.0cm、Ｐ８が21.8cm、Ｐ９が63.4cm、P10が28.5cm、P11が27.0cmを測る。また、北側壁寄りの床直上から、胴部以下を欠損した深鉢が、逆位で出土した。

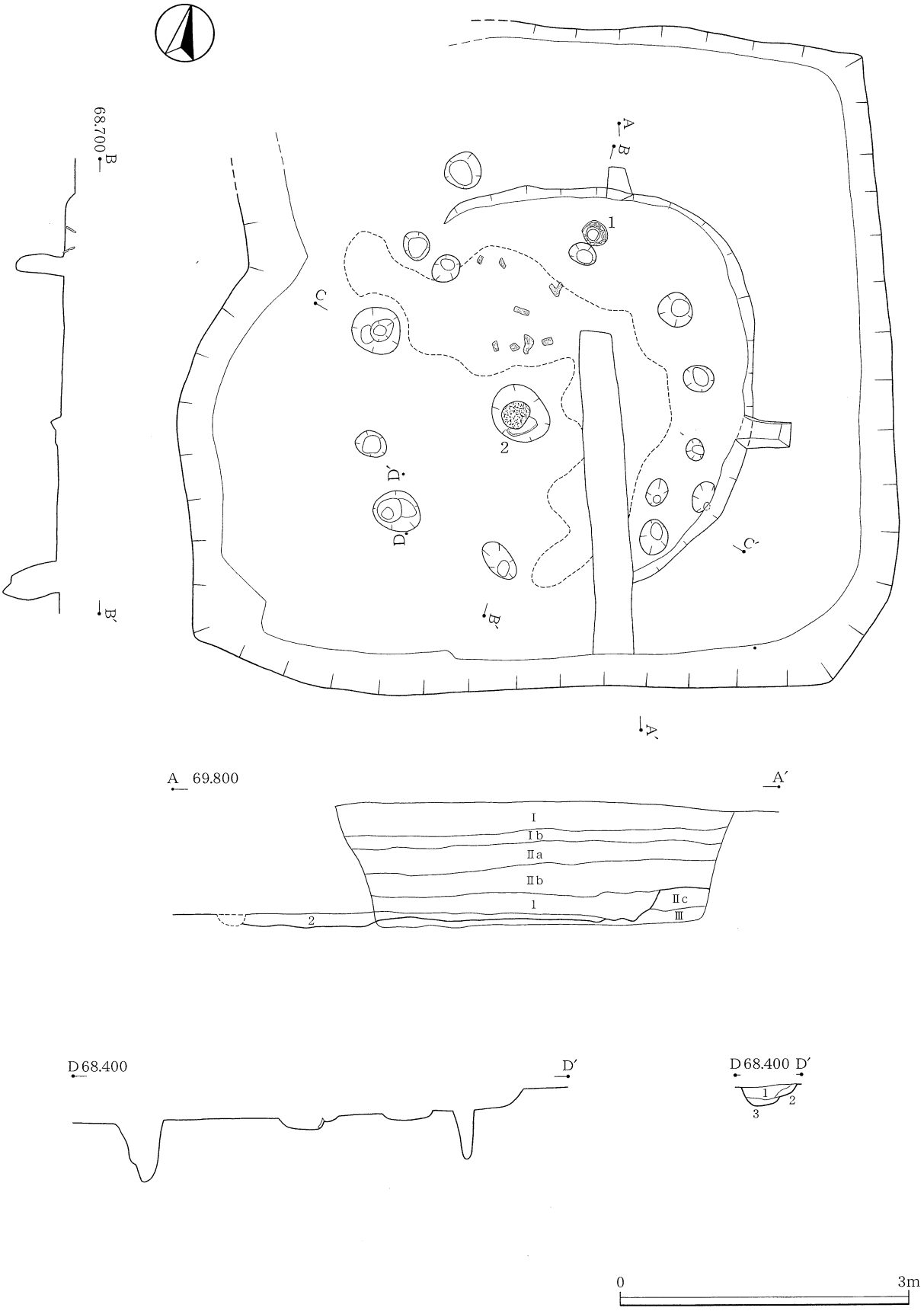
出土遺物　掲載遺物の他に小破片が僅かに出土している。加曽利ＥⅡ期。

土　層　１層は暗褐色土、２層はにぶい褐色土、3層はソフトローム主体。

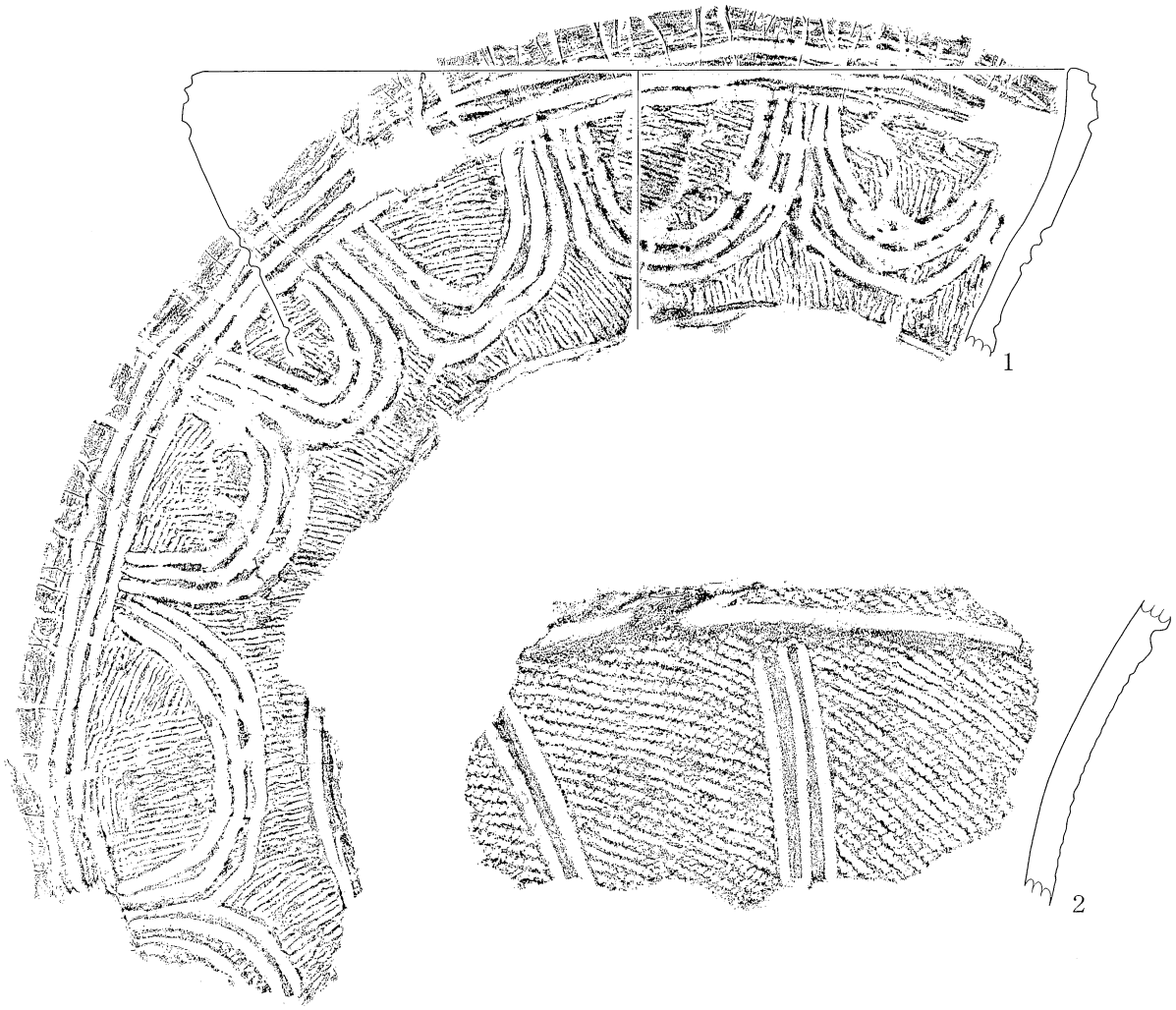
Ｅ区の遺構・遺物

26トレンチ土坑（第14図）

遺　構　Ｅ区南側に位置する。底面の標高は68.20m±２cmを測る。平面形態は、掘り込み面では楕円形を、底面に於いては長方形を呈し、断面形はほぼ逆台形を呈する。底面は緩やかな凹凸を含むが、ほぼ平坦である。遺構の規模は、長軸1.62m、短軸1.06m、確認面から底面までは55.2cmを測る。遺構の時期については、遺構覆土がⅡｂ層に覆われているため、縄文中期の他遺構と大きな時期差を持



第13図　D区１号住居実測図（1：60）



第14図　Ｄ区１号住居遺物実測図（1：3）

棚井のではないかと推定する。

出土遺物　皆無である。

土　層　1層は7.5ＹＲ3/2黒褐色土で、粗いローム粒を少量含む、2層は7.5ＹＲ2/2黒褐色土で、粗いローム粒を僅かに含む。

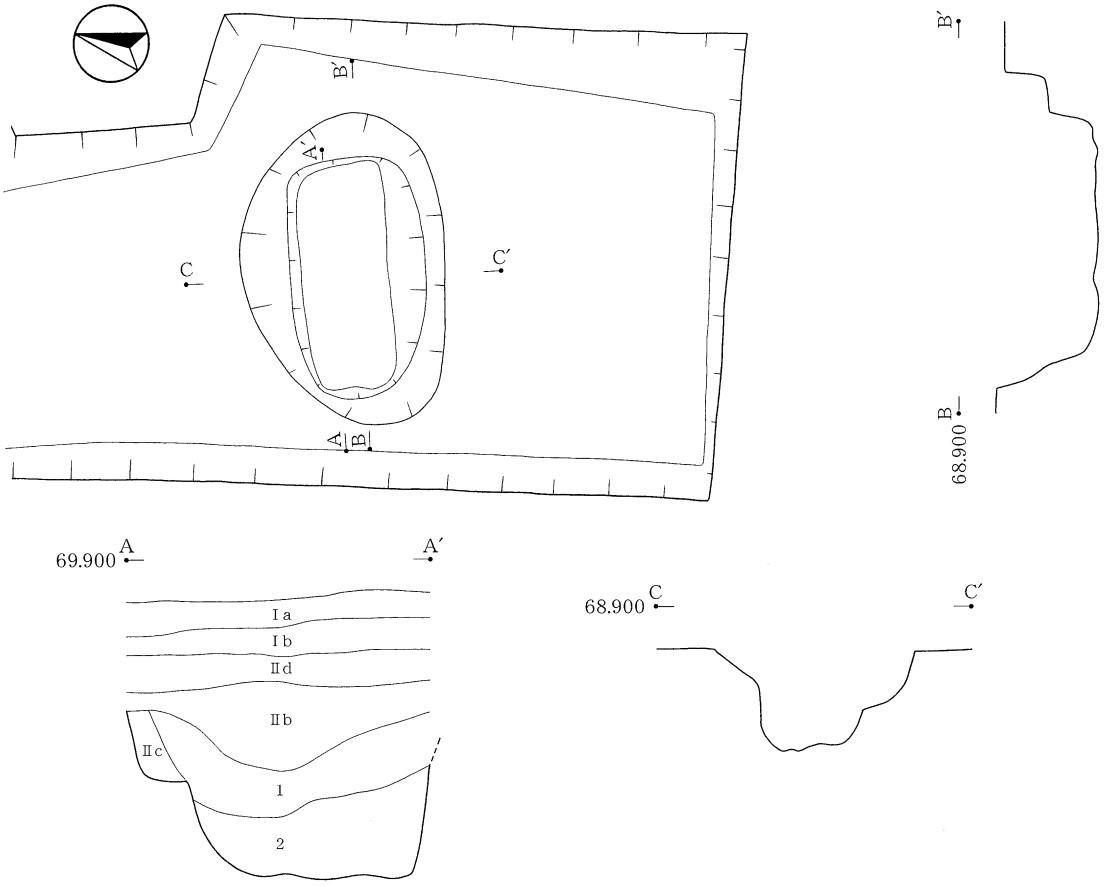
Ｆ区の遺構・遺物

17号トレンチ土坑（第15図）

遺　構　Ｆ区中央に位置する。底面の標高は68.49m±1.6cmを測る。平面形態は、不整方形もしくは不整楕円形を呈し、断面形はほぼ箱形を呈する。底面はほぼ平坦である。遺構の規模は、長軸0.98m、短軸0.92m、確認面から底面までは42.1cmを測る。遺構の時期については、Ⅱｂ層より上位から掘り込まれていること、遺構覆土最上位にⅠｂ層が認められることから、001号と近い時期、平安時代中頃の遺構ではないかと推定する。

出土遺物　皆無である。

土　層　１層は7.5ＹＲ3/4暗褐色土で、褐色土を斑状に少量含む、２層は7.5ＹＲ3/2黒褐色土で、

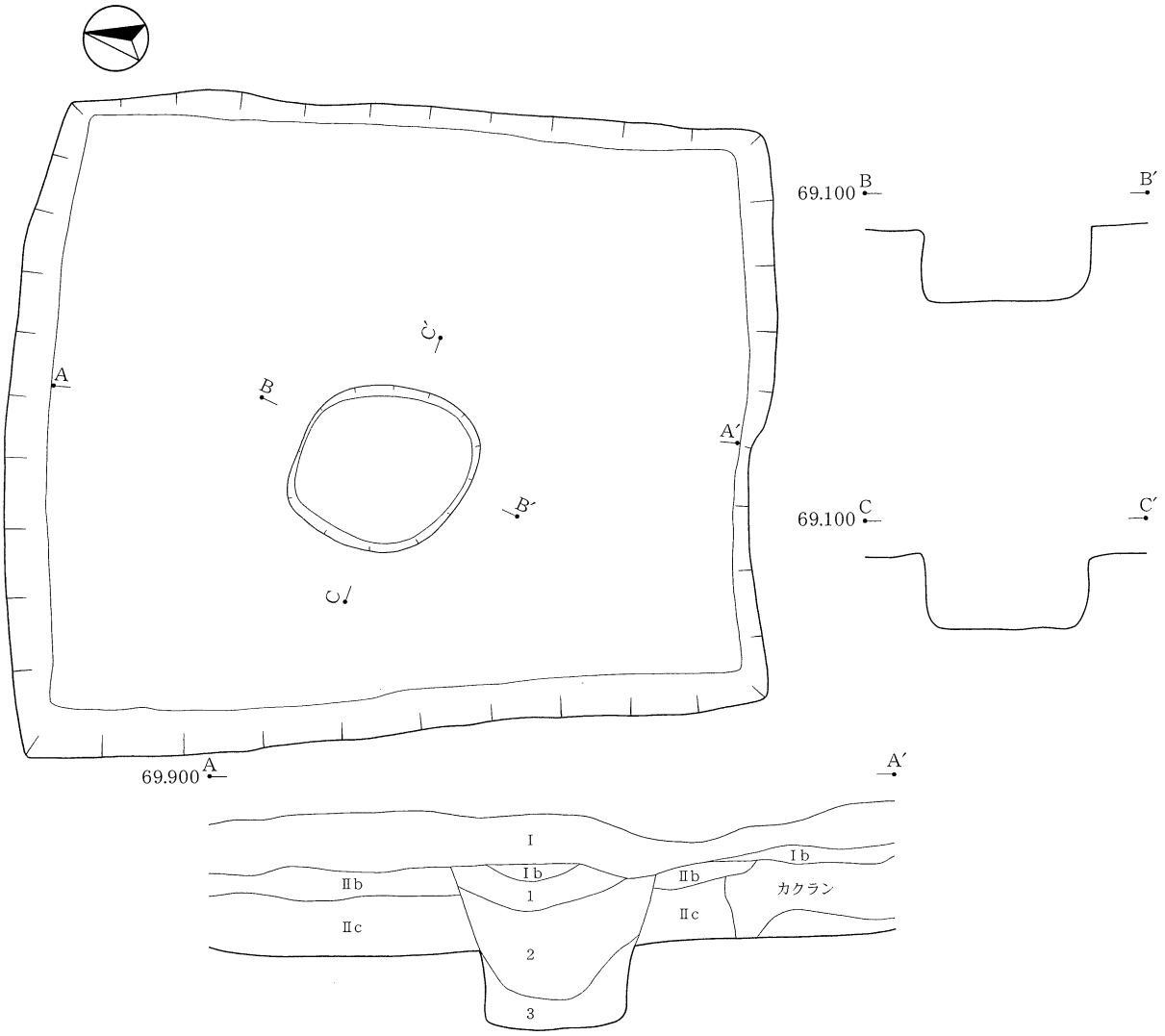


第15図　Ｅ区土坑実測図（1：40）

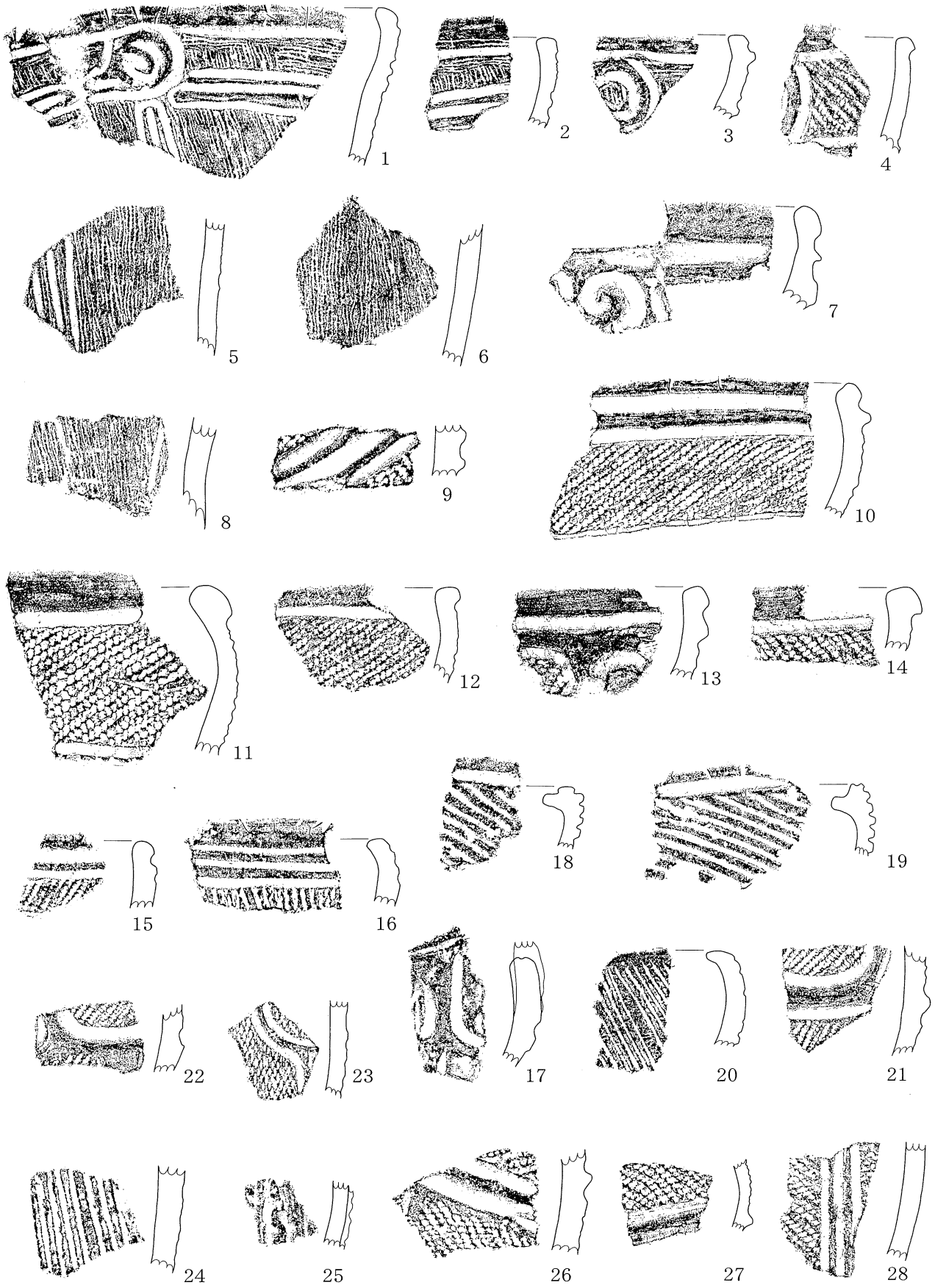
褐色土を斑状に、ハードロームブロックを少量含む、３層は7.5ＹＲ黒褐色土で、ハードロームブロックを少量含む。

遺構外の遺物（第17・18図）

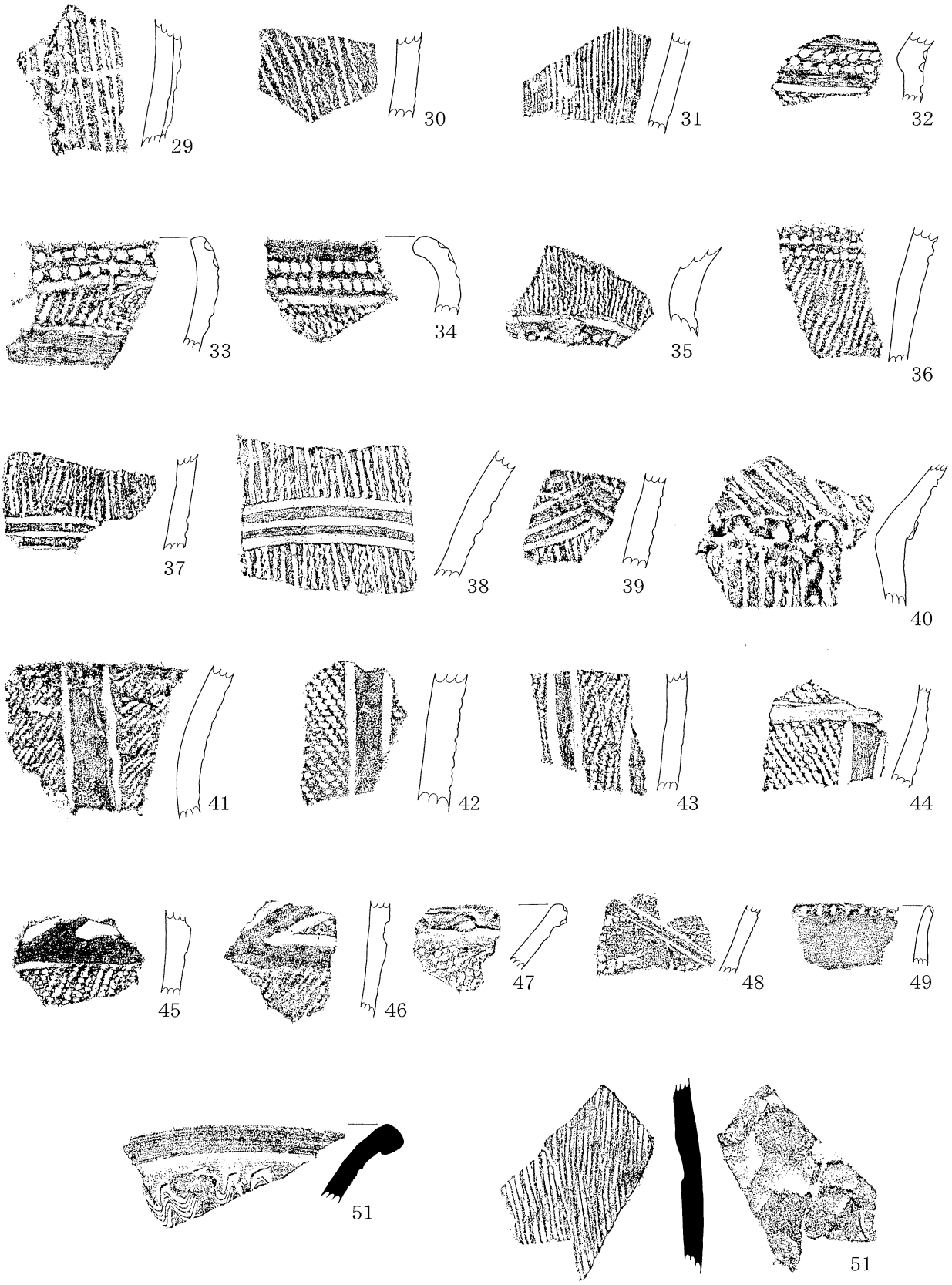
１～９は縄文時代中期加曽利ＥⅠ式である。１.２.３.５.６.８は地文は撚り糸文である。５.は３条の懸垂文の間は磨り消されていない。10～28は加曽利ＥⅡ式である。29～46は加曽利ＥⅢ式である。47・48は縄文時代後期堀之内式である。49は口縁部小片で、口唇部外面から棒状工具による刺突が施される。器面の摩滅が著しい為調整痕は確認できない。胎土、遺跡の時期を考えると、弥生土器とは考えにくい。時期不明である。50・51は須恵器である。50は胎土中に少なからず雲母を含むことから、平安時代前半、新治産であろうか。



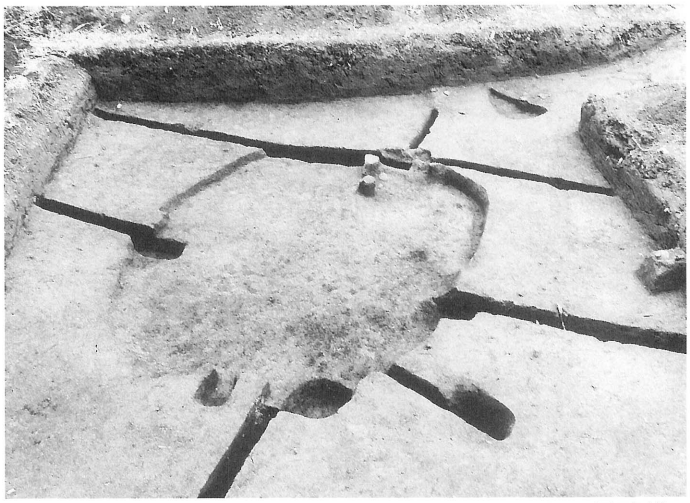
第16図　F区土坑実測図（1：40）



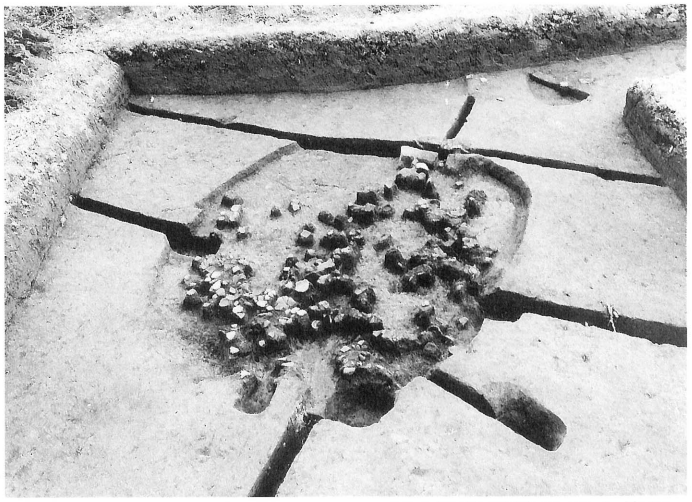
第17図　遺構外遺物（1）加曽利ＥⅠ・ＥⅡ（1：3）



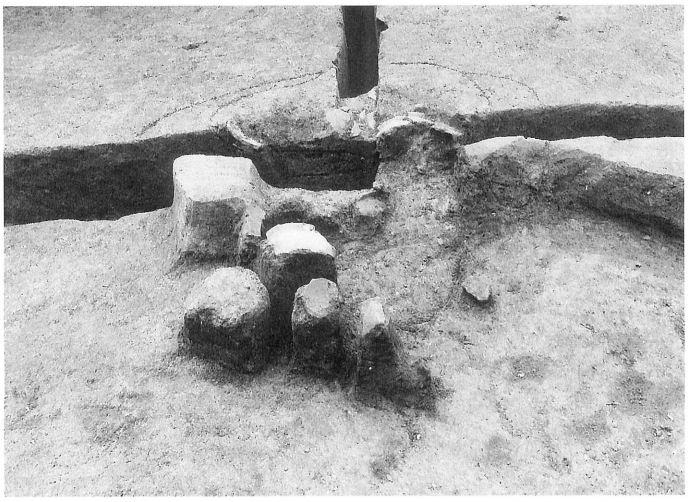
第18図　遺構外遺物（2）加曽利ＥⅢ・堀之内等（1：3）



001号遺構



001号遺構遺物出土状況

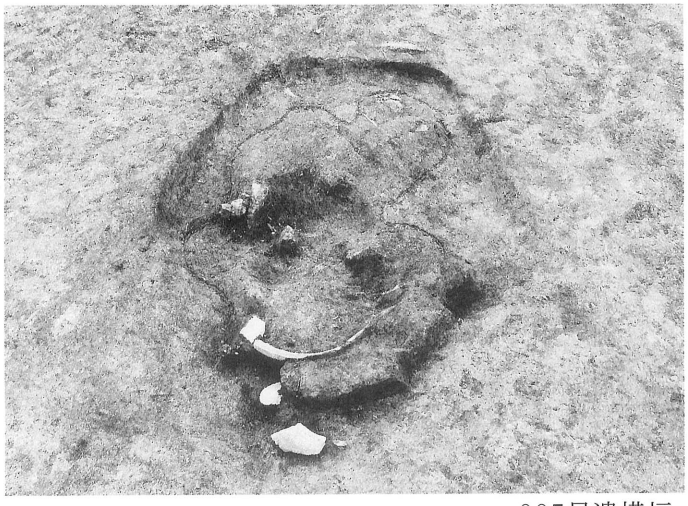


001号遺構カマド周辺

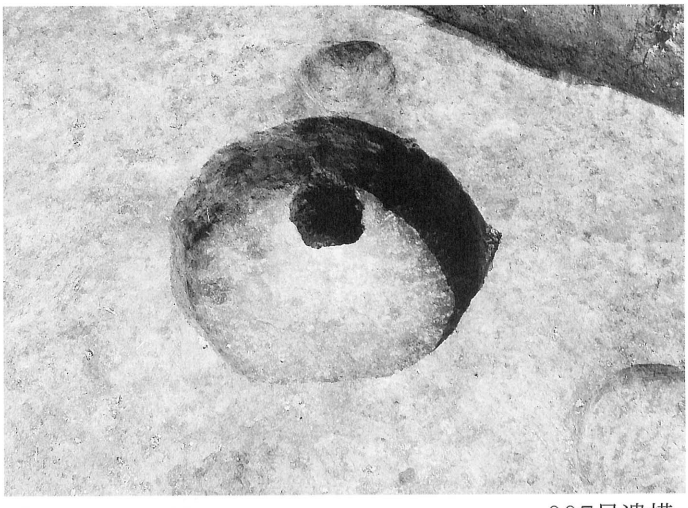
001号遺構遺物出土状況

B区全景

005号遺構



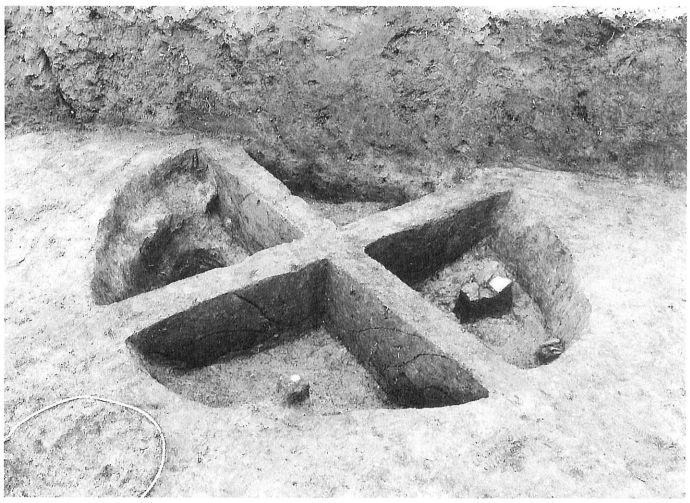
005号遺構炉



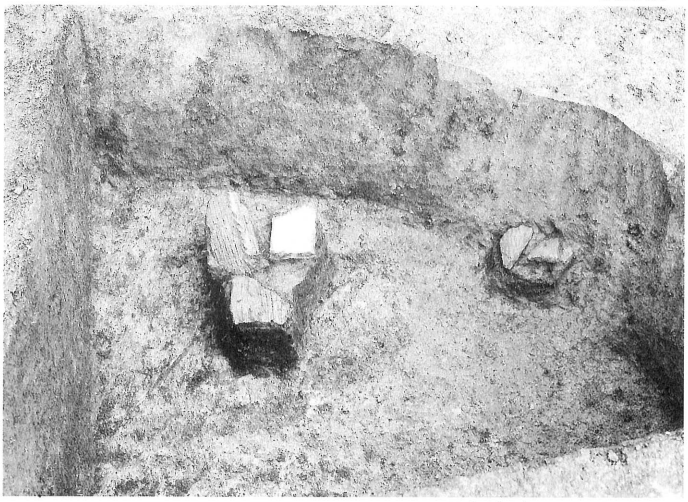
007号遺構

図版２

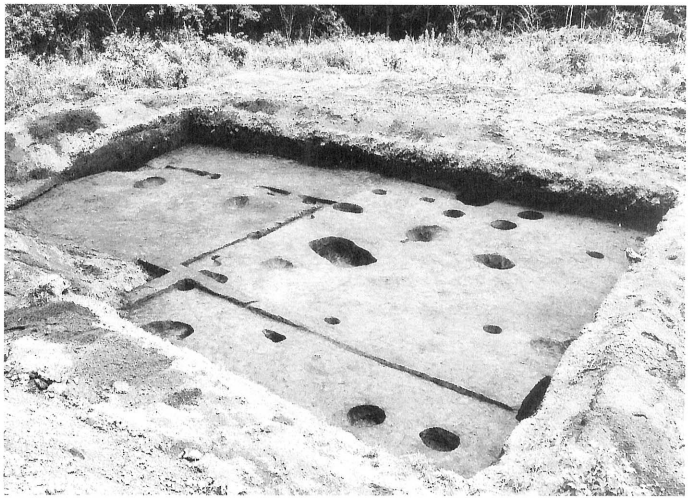
006号遺構



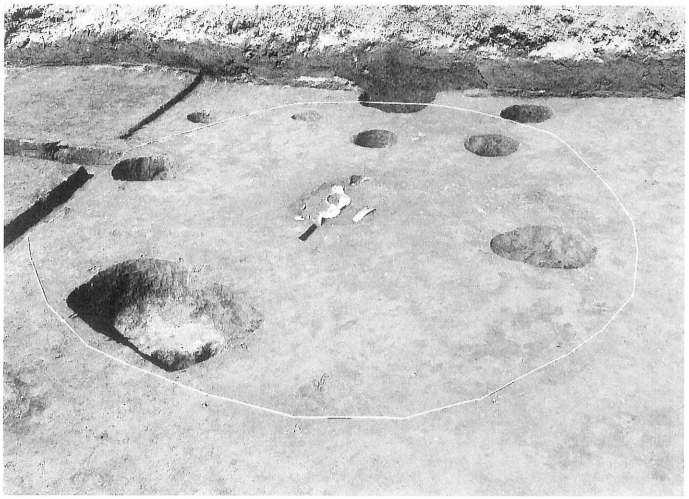
006号遺構



006号遺構遺物出土状況



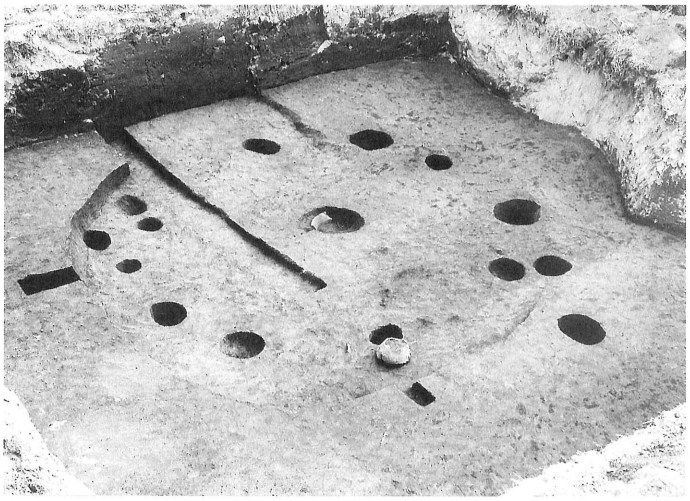
C区全景



002号遺構

002号遺構炉

002号遺構炉体土器

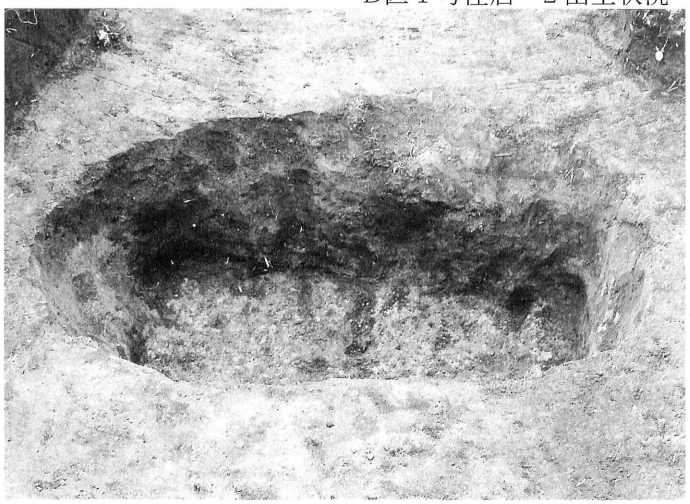


D区1号住居

D区１号住居　１出土状況

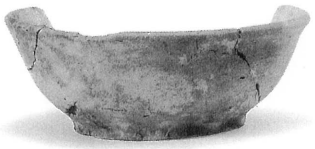
D区１号住居　２出土状況

Ｆ区土坑



Ｅ区土坑

００１－１

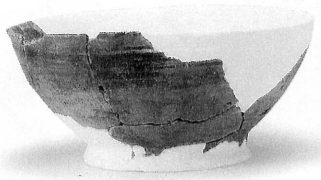


００１－２

００１－４

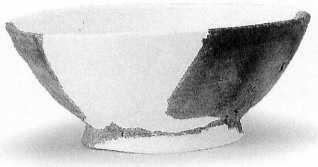
００１－５

図版４

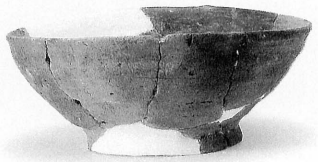


001－6

001－7

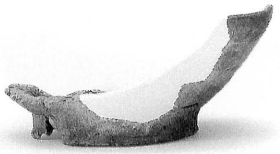


001－8



001－9

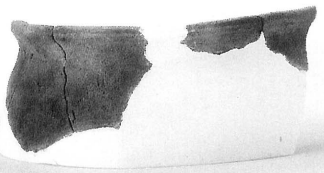
001－15



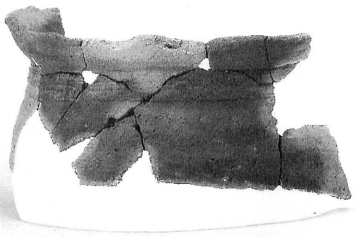
001－16

001－17

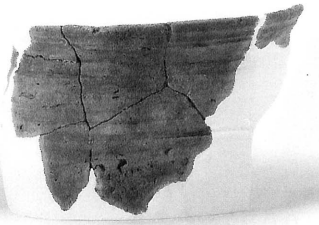
001－18



００１－２５



００１－２６



００１－２８

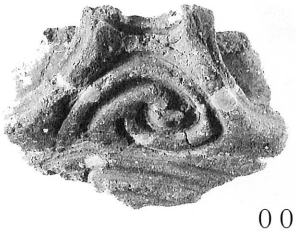
００１－３２

００２－１

Ｄ区１号住居１

図版６

００２－３



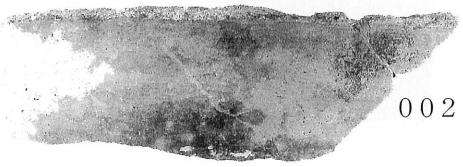
００２－２

００２

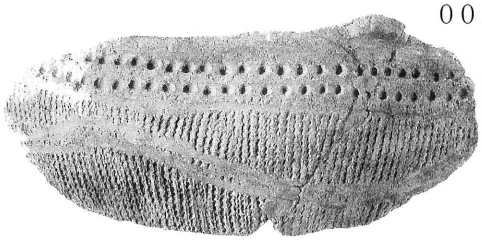
００５－１

００５－２

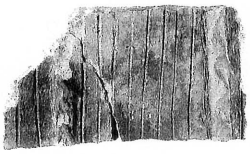
００２



００２

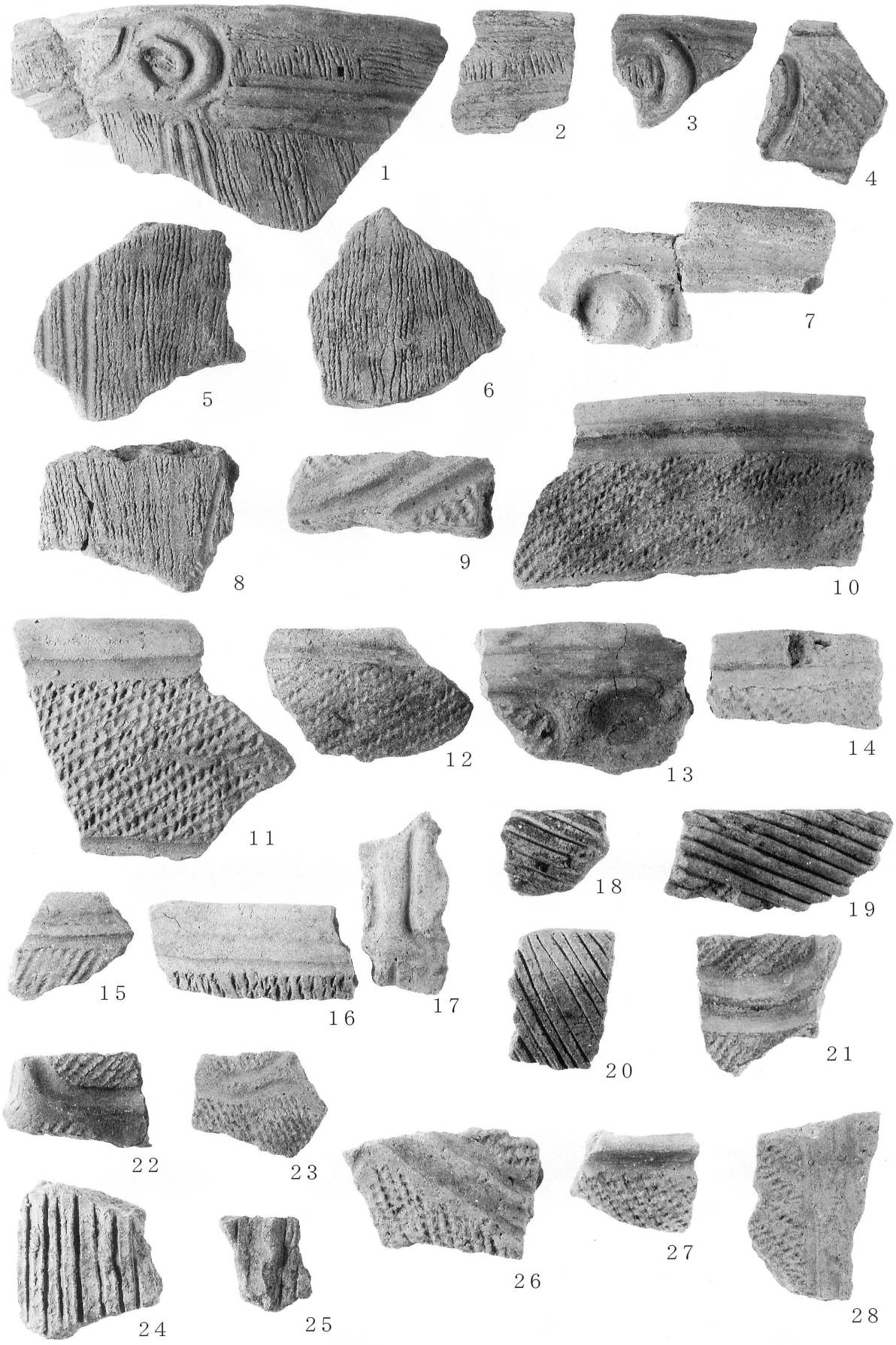


００５－４

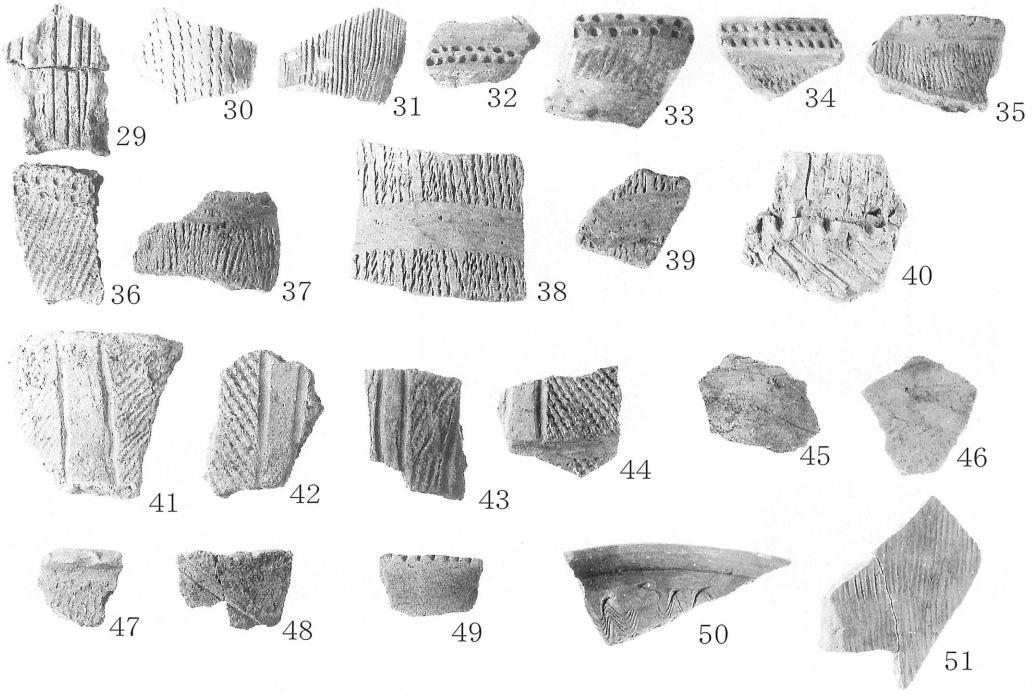


００６－１

００６－２



遺構外遺物(1)

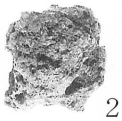


遺構外遺物(2)

001-33

001-34

1



2

3

4

5

6

7

001号遺構出土鉄滓

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしきたなかだいいせき
書名	市原市喜多仲台遺跡
副書名	
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第75集
編著者名	北見　一弘
編集機関	財団法人 市原市文化財センター
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地　TEL.0436-41-7300
発行年月日	2001年３月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
喜多仲台遺跡（きたなかだいいせき）	千葉県市原市喜多567-1の一部ほか	12219	セ325	35°29′46″	140°11′27″	20000615～20000704	450㎡	土砂採取に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜多仲台遺跡	集落跡	縄文時代中期 平安時代	竪穴住居跡３軒 土坑　２基 陥し穴　２基 土坑　１基 竪穴住居跡１軒 土坑　１基	縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、鉄塊	調査例の少ない村田川中流域における縄文時代中期の集落と、平安時代中頃の比較的豊富な遺物量を持った竪穴住居跡を検出した。

財団法人市原市文化財センター調査報告書　第75集

市原市喜多仲台遺跡

平成13年３月26日　印刷
平成13年３月30日　発行

編 集　財団法人　市原市文化財センター

発 行　三 喜 興 業 株 式 会 社
財団法人　市原市文化財センター
〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地
ＴＥＬ　０４３６（４１）９０００

印 刷　三 陽 工 業 株 式 会 社
〒290-0056 千葉県市原市五井5510-1番地
ＴＥＬ　０４３６（２２）４３４８